

**新潟市中央区
ひとり暮らし高齢者の
生活と意識に関する
調査報告書【概要版】**



**2011年3月
新潟市中央区社会福祉協議会
新潟県立大学**

序文にかえて

皆さんは、「ひとり暮らし高齢者」と聞くと、どのようなことを連想しますか。

平成 22 年 1 月 31 日に放送された NHK スペシャル「無縁社会」を発端に、年間 3 万人以上が無縁死しているというような事実が明らかになり全国に衝撃が走りました。

しかし、これはあくまでテレビで先鋭的に報道されたものと思いたいのは、私だけでしょうか。

当事者であるひとり暮らし高齢者の方々はどう見たのでしょうか。

中央区社会福祉協議会は、平成 19 年 4 月から新潟市の政令市への移行と同時に設立されました。

平成 20 年度から「ひとり暮らし高齢者等見守りネットワーク事業」という名称で見守り事業を開始し、友愛訪問、地域の茶の間（サロン）などの各種事業を推進しています。

平成 21 年度には、「中央区地域健康福祉計画・地域福祉活動計画」を中央区役所と共同で策定しました。策定前に新潟市で行った「新潟市福祉のまちづくりアンケート」（満 20 歳以上の男女、住民基本台帳より無作為抽出）では、『あなたは、日頃の生活の中でどのような悩みや不安を感じていますか』という設問（複数回答）で、6 割近くの方が世代に関係なく「自分や家族の健康のこと」、「自分や家族の老後のこと」と回答しました。

また、都市化の進む中央区では他の区に比べ、いち早く単身・核家族化が進行し、ひとり暮らし高齢者や高齢者のみ世帯が増加しています。単身化と高齢化が同時に進むことにより、買い物、交通手段、雪かきといったこれまで予想もつかなかった都市の中の限界集落とも言うべき生活の課題も浮かび上がってきました。

このような経過を踏まえ、中央区社会福祉協議会では、ひとり暮らし高齢者の生活実態の把握の必要性を再認識し、その調査結果からより効果的な支援の内容を探るべく、平成 22 年度事業として、「ひとり暮らし高齢者の生活と意識の調査」を行うことにいたしました。

今回の調査で私たちが出会ったのは、テレビ放映されたひとり暮らし高齢者の寂しいイメージとは隔たりのある、それぞれが人生を楽しんでいる姿であり、また一方で、家

族、地域、情報から孤立している可能性のある姿でもありました。

終戦後、それまでの抑圧された日本社会から多様な生活様式を尊重する大量消費社会が到来し、結果として多様なひとり暮らし高齢者のあり方が生まれています。それは、否定することではなく、ひとり暮らし高齢者の生活や意識、生き方は同質ではないということに他なりません。

調査実施にあたっては、中央区内の民生委員をはじめ数十名の社協職員・学生が関わり、第1次調査（アンケート調査）だけではなく、第2次調査（訪問面接調査）をすることで、ひとり暮らし高齢者に共通する生活の課題（生活上の困りごと、近隣関係、緊急時の支援者の有無）と将来に対する不安など意識の部分にも迫ることができました。

私たち、一人ひとは紛れもなく地域に住み、他者との関わり合いの中で生きています。残念ながら、本人の意図しない社会環境、家族環境の変化や健康上の理由などで、社会的に孤立する可能性のあるひとり暮らし高齢者が多くいることも事実です。まずは、行政、専門機関、社協、地域コミュニティ、もちろん当事者も含めて、何かあったら駆けつけ合える地域づくりを共にできたらと思います。

今回の調査により、ひとり暮らし高齢者の方々から多くの示唆に富んだご回答を頂きました。

ここに調査にお答えいただいた多くの皆様と関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月

新潟市中央区社会福祉協議会
会 長 圓 山 孝

目次

序文にかえて

I	調査の概要	1
II	新潟市中央区の地域概況	2
III	調査の結果	
A	1次調査の結果から	
1	1次調査回答者の状況	6
2	近所づきあい・緊急時の支援者の状況	12
3	生活上の困りごとについて	16
B	自由記述の内容から	
1	行政・福祉・医療サービスについて	22
2	日常生活について	24
3	居住地域における生活環境について	26
4	不安について	27
C	2次調査の結果から	
1	類型化の考え方について	30
2	2次調査回答者から抽出した事例より	32
3	困りごとについて	39
【資料】	1次調査調査票質問項目	43

I 調査の概要

1 調査の目的

本調査の目的は、多様な生活状況にあるひとり暮らし高齢者の実態を明らかにすることで、より効果的な支援のあり方等を検討するための基礎資料を得ることを目的に実施した。

調査にあたっては、特に生活上の困りごと、近隣との関わり、緊急時の支援者の有無などに着目して、アンケート調査及び訪問面接調査を行った。

2 調査主体

調査主体は、新潟市中央区社会福祉協議会と新潟県立大学である。中央区社会福祉協議会は2010（平成22）年度の事業として、新潟県立大学は2010年度の教育研究活動推進事業「課題解決型研究プロジェクト推進事業」として調査研究を行った。

調査の企画と実施については、中央区社会福祉協議会と新潟県立大学子ども学科小澤研究室が共同で行った。アドバイザーとして、調査の企画段階から報告書のまとめまで社会的孤立調査で実績のある明治学院大学河合克義研究室が関わった。また、第1次調査の対象者抽出と調査票配布を新潟市中央区民生委員児童委員会長連絡会の協力により行った。

3 調査対象・調査方法等

項目	調査対象／実施期間	有効回答数	調査方法
第1次調査	平成21年9月現在、民生委員が把握している満65歳以上のひとり暮らし高齢者4,038名のうち1,346名 ・平成22年6月17日～7月15日	1,159 (86.1%)	民生委員が把握しているひとり暮らし高齢者の概ね3分の1に対し調査票を手渡し、回収は郵送で行った。
第2次調査	第1次調査の調査票で第2次調査に同意し氏名・連絡先を記入した213名のうち49名 ・平成22年11月6日～11月7日	49	第1次調査の結果を「緊急時の支援者の有無」「近所づきあいの程度」の指標で類型化し、同意したひとり暮らし高齢者を社協職員・新潟県立大学学生が訪問し聞き取り調査を行った。

報告書における表および図表の見方

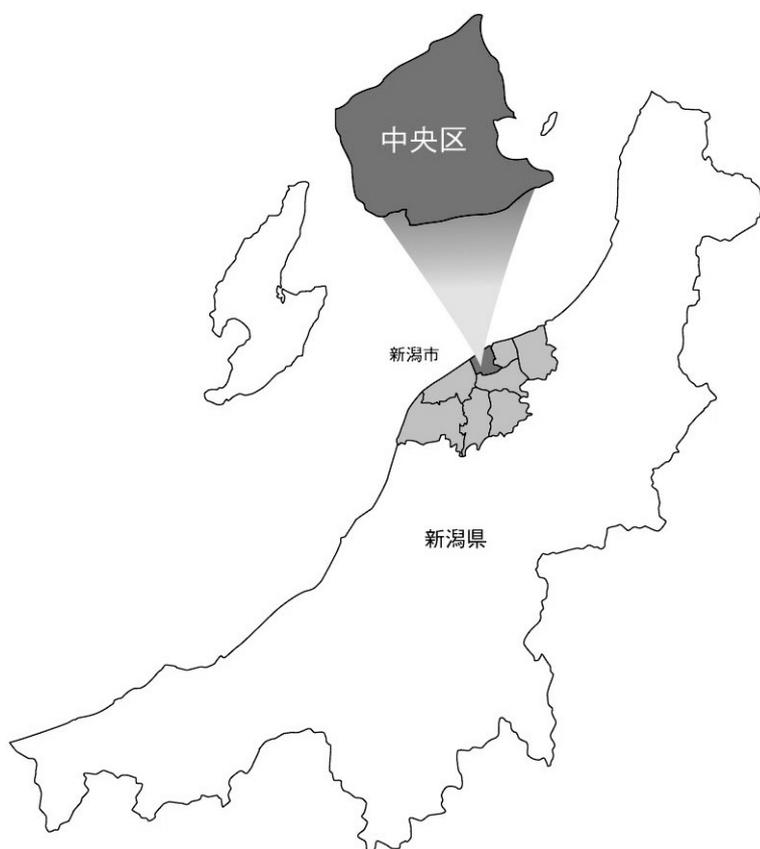
- (1) グラフや数表では、各質問の回答者数を母数とした百分率（%）で回答比率を示している。
百分率（%）は、原則として小数第2位を四捨五入し、小数第1位までを表示しているため、比率の合計が100%を前後する場合がある。
- (2) 複数回答を求めた質問では、回答比率の合計が100%を超える。
- (3) 図表内のnは、回答の合計数である。例えば、n=1159の場合、回答数は1,159となる。

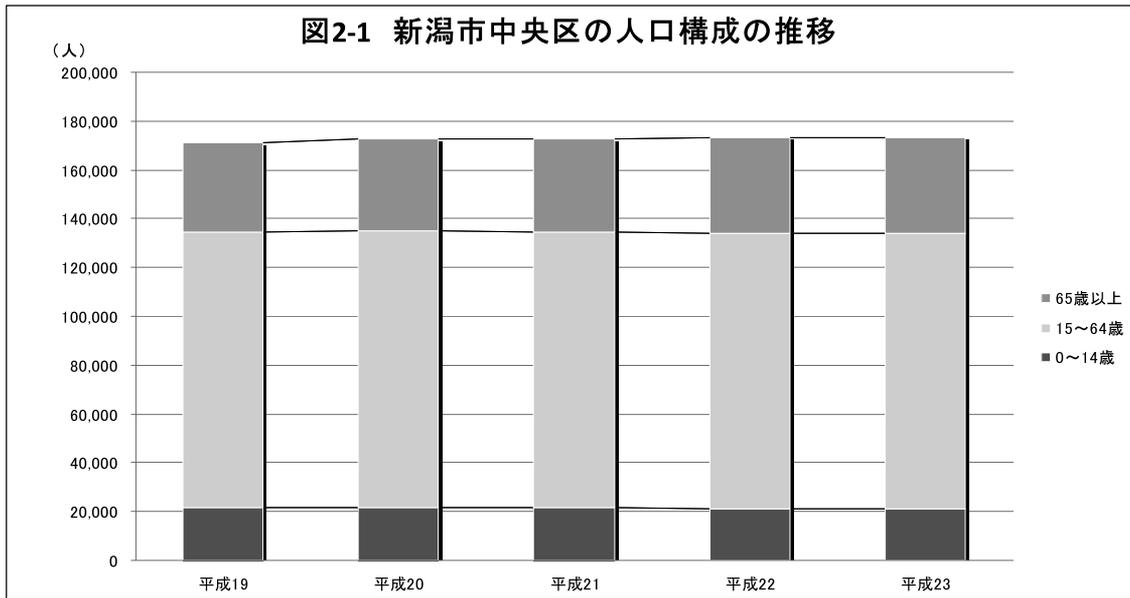
Ⅱ 新潟市中央区の地域概況

1 中央区の概況

中央区は、新潟市の日本海側のほぼ中央に位置し、北は日本海に開け、中央に信濃川が流れている（下図参照）。中央区の面積は（国土地理院）、37.42 平方 km で、新潟市全体（726.10 平方 km）の 5.15%の大きさである。

平成 23 年 1 月末現在の「住民基本台帳」によると、新潟市中央区の人口は 173,373 人、世帯数 80,223 世帯であった。中央区は市内 8 区の中で最も多い人口を有していて、新潟市の人口の 21.6%を占めている。人口数はここ数年ほぼ横ばいで、平成 19 年からの増加数は 2,196 人であった。なお、新潟市全体では、同期間で 1,463 人の増加にとどまっている。年齢構成については、住民基本台帳（各年 1 月末時点／平成 19 年のみ 3 月末）によると、0～14 歳 12%、15 歳～64 歳 65%、65 歳以上 23%で、大きな変化は見られていない（図 2-1）。





(資料) 「住民基本台帳」(各年版)より作成。

新潟市中央区の事業所数は(「平成18年事業所・企業統計調査」)、新潟市全体と比べると、第2次産業の比率が9.3%(新潟市17.3%)と低く、第3次産業は88.7%(79.5%)と高い。その中で卸売・小売業は29.7%で市とほぼ同じ比率(29.0%)を占めているが、建設業、製造業は低く、飲食店・宿泊業が高い。そのため、従事者も第2次産業では10.7%(21.7%)と低く、第3次産業が79.5%(70.3%)となっている。なお、「平成19年商業統計調査結果」によると、卸売・小売業の年間販売額の46.8%(1兆6703億円)を中央区が占めている。

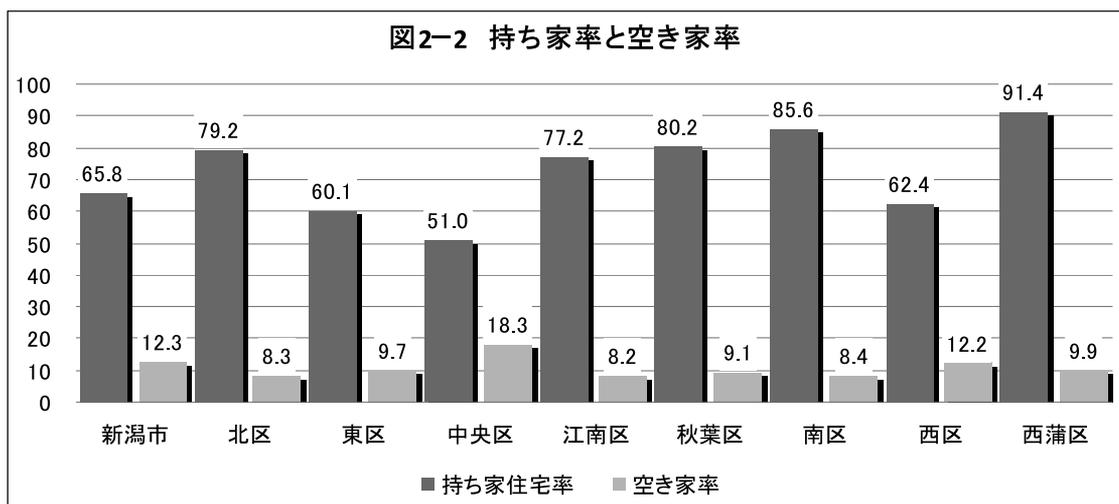
表2-1 新潟市中央区の産業

産業分類 (実数、%)	事業所数				従業者数			
	中央区		新潟市		中央区		新潟市	
総数	14,421	100.0	38,887	100.0	154,437	100.0	381,485	100.0
第1次産業	7	0.0	96	0.2	86	0.1	1,311	0.3
農業	4	0.0	93	0.2	15	0.0	1,240	0.3
林業	1	0.0	1	0.0	5	0.0	5	0.0
漁業	2	0.0	2	0.0	66	0.0	66	0.0
第2次産業	1,336	9.3	6,730	17.3	16,465	10.7	82,849	21.7
鉱業	2	0.0	15	0.0	110	0.1	312	0.1
建設業	941	6.5	4,358	11.2	12,474	8.1	37,518	9.8
製造業	393	2.7	2,357	6.1	3,881	2.5	45,019	11.8
第3次産業	12,786	88.7	30,931	79.5	122,843	79.5	268,329	70.3
電気・ガス・熱供給・水道業	10	0.1	30	0.1	1,027	0.7	1,327	0.3
情報通信業	282	2.0	357	0.9	7,381	4.8	8,575	2.2
運輸業	181	1.3	815	2.1	6,172	4.0	21,332	5.6
卸売・小売業	4,279	29.7	11,293	29.0	33,281	21.5	87,353	22.9
金融・保険業	337	2.3	603	1.6	7,779	5.0	10,430	2.7
不動産業	832	5.8	1,533	3.9	2,993	1.9	4,534	1.2
飲食店・宿泊業	2,446	17.0	4,555	11.7	15,757	10.2	27,717	7.3
医療・福祉	702	4.9	2,120	5.5	9,509	6.2	31,958	8.4
教育・学習支援業	449	3.1	1,353	3.5	5,910	3.8	12,579	3.3
複合サービス事業	100	0.7	296	0.8	1,083	0.7	3,864	1.0
サービス業(他に分類されないもの)	3,168	22.0	7,976	20.5	31,951	20.7	58,660	15.4
公営	292	2.0	1,130	2.9	15,043	9.7	28,996	7.6

(資料)「平成18年事業所・企業統計調査」より作成。

「平成 20 年住宅・土地統計調査」によると、新潟市中央区の住宅総数は 95,440 戸、世帯総数は 77,740 世帯数で、住宅総数が上回っている。空き家率が 18.3%で、中央区が一番高い（新潟市 12.3%）。「居住世帯のある住宅」の建て方別にみると、中央区は「一戸建」が 42.3%、「共同住宅」が 55.8%で、「共同住宅」が「一戸建」を上回っている。「共同住宅」の比率は、新潟市 31.6%、全国 41.7%で、中央区における「共同住宅」の比率の高さが目立つ。

なお、中央区は新潟市の共同住宅総数の 45.9%、「6 階建以上」では 82.5%を占めている。また、公営の借家は 630 戸で、「居住世帯のある住宅」76,900 戸の 0.8%と小さい（東区の公営借家の比率は 5.4%）。持ち家率は 51.0%で、新潟市 65.8%、全国 61.1%を大きく下回っている（図 2-2）。



2 高齢者の状況

ここでは、調査企画時点における「住民基本台帳」のデータ（平成 21 年 9 月末時点）をもとに、高齢者の状況をみていく。新潟市中央区の人口は 173,004 人、世帯数 79,405 世帯であった。65 歳以上の人口は 39,026 人で、高齢化率は 22.6%であった。新潟市全体の高齢化率は 22.8%でほぼ変わらなかった（全国 22.7%）。平成 19 年 3 月末時点のデータでは、中央区の高齢化率が 21.4%、新潟市が 21.5%で、2 年間で高齢化率がそれぞれ 1 ポイント程度増加した。

次に、この住民基本台帳（平成 21 年 9 月末時点）に基づき、実質ひとり暮らし高齢者の出現率をみていく。出現率は、（ひとり暮らし高齢者世帯）÷（高齢者のいる世帯数）で算出した。それによると中央区ではひとり暮らし高齢者の出現率が 35.8%であ

った（表 2-2）。これは東区 28.6%、西区 27.2%を遥かに上回る大きさであり、中央区のひとり暮らし高齢者比率の大きさが示される。

また、平成 19 年 3 月末時点のひとり暮らし高齢者の出現率は、中央区では 33.5%であり、それ自体大きいですが、地域の高齢化率よりも、ひとり暮らし高齢者の出現率が速いペースで増加している。先にみたように中央区全体の人口構成としては、ここ数年で大きな変化はみられないが、ひとり暮らし高齢者については、大きな変化がみられる。

表 2-2 ひとり暮らし高齢者の出現率

区別	平成 21 年 9 月末時点	
	ひとり暮らし 高齢者の出現率	高齢化率
新潟市	26.1	22.8
北区	20.4	21.9
東区	28.6	22.0
中央区	35.8	22.6
江南区	23.0	22.2
秋葉区	20.8	25.4
南区	15.4	22.6
西区	27.2	22.7
西蒲区	17.2	24.9

（資料）「住民基本台帳」より作成。

さらに、65 歳以上人口の男女比をみると、男性 15,771 人（40.4%）、女性 23,225 人（59.5%）で、女性の比率が 10%ほど高い。これをひとり暮らし高齢者でみていくと、同様の数値で比較はできないが、旧新潟市（平成 17 年国勢調査）では、男性 4,342 人（24.6%）、女性 13,305 人（75.4%）であった（表 2-3）。

65 歳以上のいる 2 人以上の世帯では、男性 44.7%、女性 55.3%であり、ひとり暮らしと 2 人以上の世帯で男女の構成比が大きく変化すること、つまりひとり暮らしの男性の比率が低くなるのがわかる。このように 2 人以上世帯の男女比と、ひとり暮らし世帯の男女比の違いは、全国的なデータでも同様の結果がでている。

表 2-3 世帯構成別性別の 65 歳以上のいる世帯の割合

性別		65 歳以上の単身世帯			65 歳以上いる世帯		
		旧新潟市	新潟県	全国	旧新潟市	新潟県	全国
総数	世帯数	17,647	53,138	3,864,778	132,838	497,123	20,429,508
男	世帯数	4,342	12,814	1,051,207	59,382	217,709	9,442,543
	%	24.6	24.1	27.2	44.7	43.8	46.2
女	世帯数	13,305	40,324	2,813,571	73,456	279,414	10,986,965
	%	75.4	75.9	72.8	55.3	56.2	53.8

（資料）「平成 17 年国勢調査」より作成。

Ⅲ 調査の結果

A 1次調査の結果から

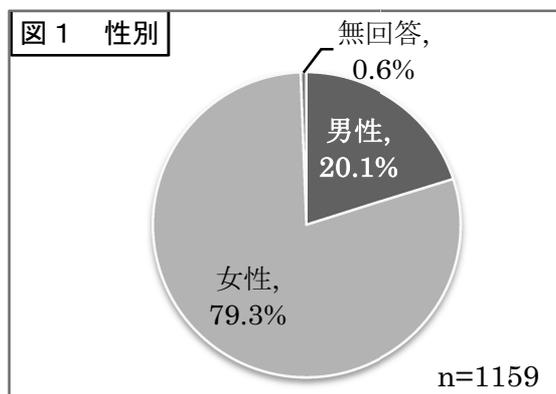
1 1次調査回答者の状況

(1) 回答者のうち79%が女性

性別については、男性が20.1% (223人)、女性が79.3% (919人)である。

<参考>

中央区社会福祉協議会で実施している友愛訪問事業の対象人数では、ひとり暮らし高齢者2,965人中594人が男性(20.0%)
※平成22年10月現在

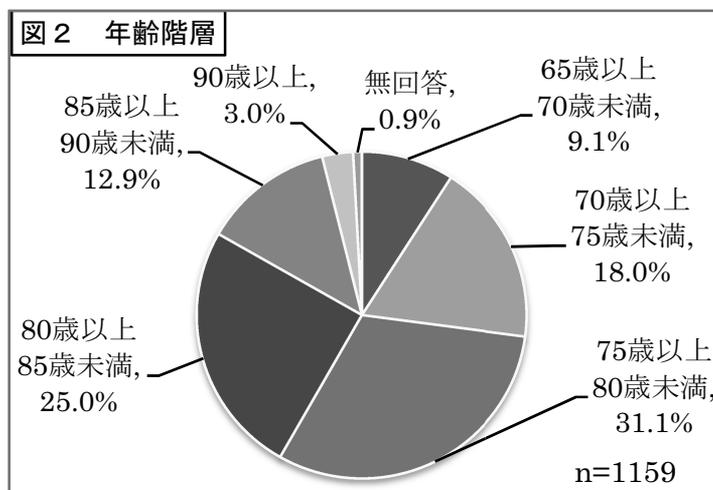


(2) 「75歳以上85歳未満」が56%を占める

年齢階層については、「75歳以上80歳未満」が最も多く31.1% (361人)、次いで「80歳以上85歳未満」が25.0% (290人)、「70歳以上75歳未満」が18.0% (209人)を占めた。

これらをまとめると、65歳以上75歳未満は27.1%で、75歳以上85歳未満が56.1%、85歳以上が15.9%であり、75歳以上85歳未満が半数強を占めている。

なお、調査回答者の平均年齢は78.3歳であった。



(3) 60%が50年以上市内に居住

旧新潟市内（現：中央区、東区、西区）への居住年数は「50年以上60年未満」が20.1%、「60年以上」が40.5%であり、全体の60%が50年以上市内に居住していることがわかる。

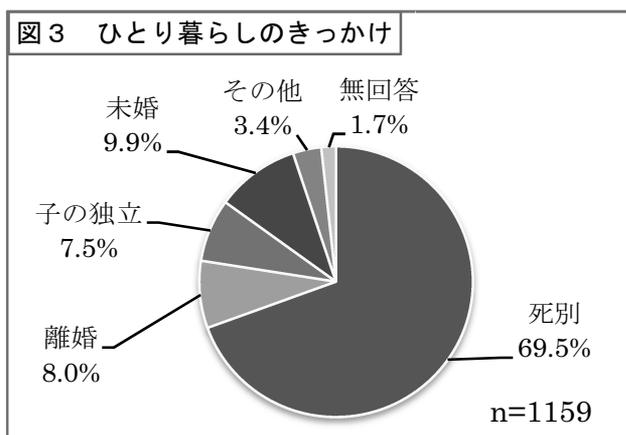
表1 市内居住年数

市内居住年数	実数	%
5年未満	6	0.5%
5年以上10年未満	13	1.1%
10年以上20年未満	44	3.8%
20年以上30年未満	62	5.3%
30年以上40年未満	109	9.4%
40年以上50年未満	159	13.7%
50年以上60年未満	233	20.1%
60年以上	469	40.5%
無回答	64	5.5%
合計	1159	100%

(4) ひとり暮らしになったきっかけは「死別」が70%

ひとり暮らしになったきっかけについては「死別」がもっとも多く、69.5%（805人）を占めた。

ほか、「未婚」は9.9%（115人）、「離婚」は8.0%（93人）、「子の独立」は7.5%（87人）であった。



(5) ひとり暮らしの年数は10年未満が40%

ひとり暮らしの年数は、「5年以上10年未満」がもっとも多く、21.7%であった。

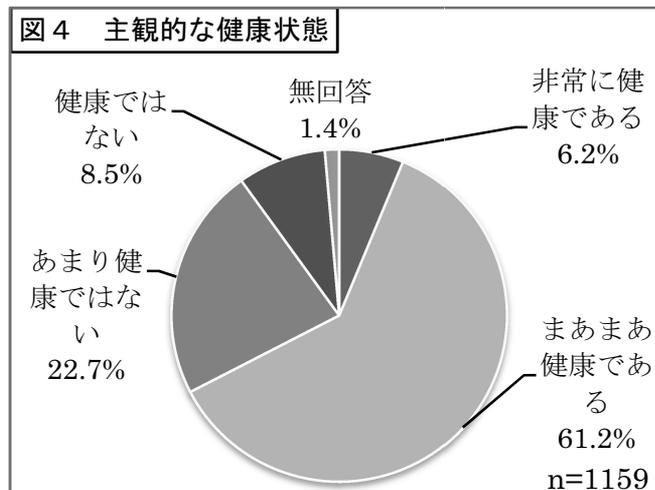
次いで、「5年未満」が18.0%であり、ひとり暮らしの年数が10年未満の人が39.7%を占めた。

表2 ひとり暮らし年数分類

ひとり暮らし年数分類	実数	%
5年未満	209	18.0%
5年以上10年未満	251	21.7%
10年以上15年未満	207	17.9%
15年以上20年未満	134	11.6%
20年以上30年未満	180	15.5%
30年以上40年未満	85	7.3%
40年以上50年未満	46	4.0%
50年以上	19	1.6%
無回答	28	2.4%
合計	1159	100%

(6) 自分は健康と思う人が67%

健康状態については、「非常に健康である」「まあまあ健康である」を合わせて67.4%が「健康である」と回答している。一方、「健康ではない」と「あまり健康ではない」を合わせると31.2%になっている。



(7) 年間収入は200万円未満が53%

年間収入は「200～399万円」がもっとも多く34.7%を占め、次いで「150～199万円」が22.3%、「100～149万円」が17.9%であった。

年間収入150万円未満が全体の31.1%を占めた。さらに200万円未満を合計すると53.4%と全体の半数強を占めている。

年間収入を4つに区分し、男女別でみたものが表4である。男性は、「150万円以下」が23.2%、「150万円以上200万円未満」が20.0%、「200万円以上400万円未満」が47.7%、「400万円以上」が9.1%であった。

一方、女性は、「150万円以下」が36.6%、「150万円以上200万円未満」が25.1%といずれも男性より高い割合を占め、また「200万円以上400万円未満」(35.4%)と「400万円以上」(2.9%)はいずれも男性よりその割合が低かった。女性の方が収入の少ない層が多い。

表3 年間収入

年間収入	実数	%
49万円以下	37	3.2%
50～99万円	116	10.0%
100～149万円	208	17.9%
150～199万円	258	22.3%
200～399万円	402	34.7%
400～699万円	39	3.4%
700～999万円	4	0.3%
1000万円以上	1	0.1%
無回答	94	8.1%
合計	1159	100%

表4 年間収入(4区分)×性別

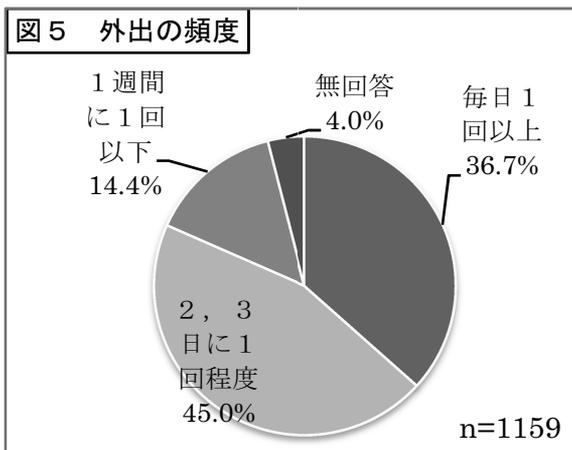
* 無回答は欠損値として集計

年間収入(4区分)	性別			
	男性		女性	
	実数	%	実数	%
150万円未満	51	23.2%	307	36.6%
150万円以上200万円未満	44	20.0%	210	25.1%
200万円以上400万円未満	105	47.7%	297	35.4%
400万円以上	20	9.1%	24	2.9%
合計	220	100%	838	100%

(8) 45%の人は、「2, 3日に1回程度」外出している

普段の外出頻度についてたずねた。「毎日1回以上」と回答した人は36.7% (425人)、「2, 3日に1回程度」と回答した人は45.0% (521人)であり、合わせて81.7%の人が、2, 3日に1回以上は外出していることがわかる。

一方、「1週間に1回以下」と回答した人は14.4% (167人)であった。



(9) 外出先では、47%の人が「たいがい話をする」

外出した際に普段どの程度会話をしているかについては、「たいがい話をする」と回答した人が46.8% (542人)、「時々話をする」が34.9% (404人)、「ほとんど話をしない」が12.7% (147人)であった。

これを男女別にみたものが表5である。男性は「たいがい話をする」人が32.0%、「時々話をする」人が41.0%、「ほとんど話をしない」人が27.0%であった。

女性は、「たいがい話をする」人が54.3%、「時々話をする」人が35.8%、「ほとんど話をしない」人が10.0%であった。

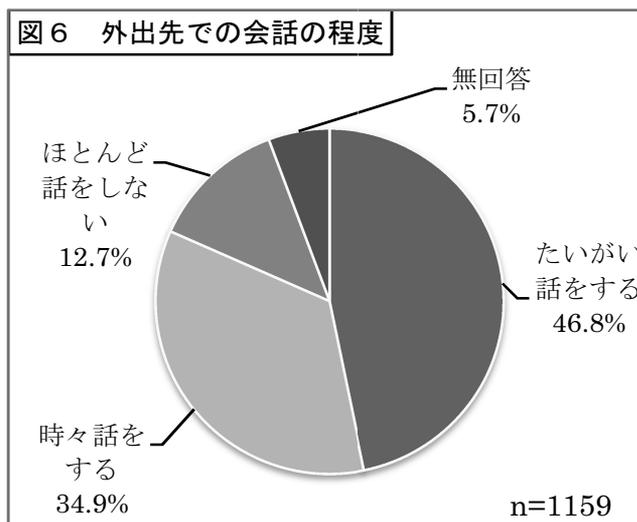


表5 外出先での会話の程度×性別

外出先での会話の程度	性別			
	男性		女性	
	実数	%	実数	%
たいがい話をする	71	32.0%	469	54.3%
時々話をする	91	41.0%	309	35.8%
ほとんど話をしない	60	27.0%	86	10.0%
合計	222	100%	864	100%

* 無回答は欠損値として集計

(10) 社会参加活動をしていない人が42%いる

現在参加している団体や集まりについて複数回答でたずねた。

もっとも多かったのは「趣味の会」で28.6%であった。ほか、「老人会」が10.8%、ボランティアなどの「社会活動」が8.3%であった。

また、「参加していない」と回答した人は42.2%であった。

表6 参加している社会参加活動（複数回答）

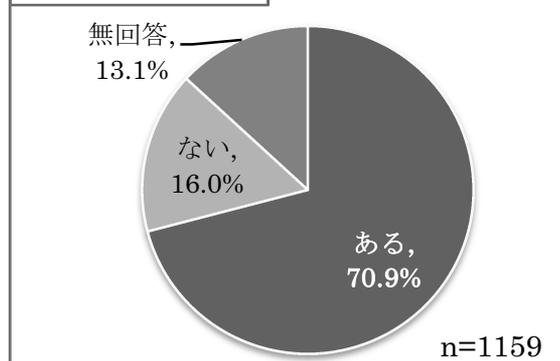
参加している社会参加活動 (n=1159)	実数	%
趣味の会（囲碁・将棋・俳句・カラオケ・お花・盆栽・お茶など）	331	28.6%
学習の会	93	8.0%
スポーツ	115	9.9%
老人会	125	10.8%
社会活動（ボランティア・同窓会・P.T.A.などの子育ての頃の団体・生協活動など）	96	8.3%
その他	135	11.6%
参加していない	489	42.2%
無回答	33	2.8%

(11) 70%の人は楽しみが「ある」

暮らしのなかの楽しみについてたずねたところ、70.9%の人が「ある」と回答している。一方、16.0%の人は「ない」と回答していた。

楽しみの内容については、趣味における楽しみを挙げた人が6割、「お茶飲み」など人とのコミュニケーションを挙げた人が2割であった。

図7 楽しみの有無



(12) 子どもとその家族と行き来する人が半数近く

日頃もっとも行き来のある家族・親族についてたずねた。もっとも多かったのは「子ども（その配偶者、孫を含む）」で49.2%とほぼ半数を占めた。次いで「兄弟・姉妹」が25.2%であった。

一方、「誰とも行き来がない」と回答した人は6.5%であった。

表7 もっとも行き来する親族／種類

もっとも行き来する親族／種類	実数	%
子ども（その配偶者、孫を含む）	570	49.2%
親	5	0.4%
兄弟・姉妹	292	25.2%
親戚	105	9.1%
その他	61	5.3%
誰ともほとんど行き来がない	75	6.5%
無回答	51	4.4%
合計	1159	100%

(13) 86%は「親しい友人・知人がいる」

日頃親しくしている友人・知人の有無については、85.9%（996人）の人が「いる」と回答した。「いない」と回答した人は10.9%（126人）であった。

男女別にみると（表8）、男性は親しい友人・知人が「いる」と回答した人が75.6%、「いない」と回答した人が24.4%であった。女性は「いる」と回答した人が92.1%、「いない」と回答した人は7.9%であった。

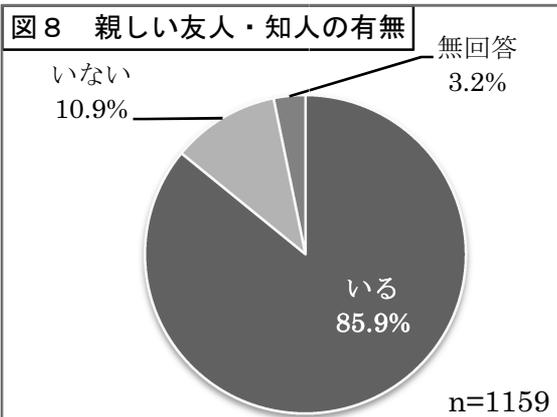


表8 親しい友人・知人の有無×性別

親しい友人知人の有無	性別			
	男性		女性	
	実数	%	実数	%
いる	170	75.6%	820	92.1%
いない	55	24.4%	70	7.9%
合計	225	100%	890	100%

* 無回答は欠損値として集計

2 近所づきあい・緊急時の支援者の状況

(1) 近所づきあいは女性の方が得意

近所づきあいの程度については、「お互いの家を訪ね合う関係」が 34.3% (397 人)、「会ったときに立ち話をするくらい」が 40.7% (472 人)、「あいさつをかわす程度」が 19.6% (227 人)であった。

男女別にみると (表 9)、女性は「お互いの家を訪ね合う関係」が 40.5%、「あいさつをかわす程度」が 15.1%であるのに対し、男性は「お互いの家を訪ね合う関係」は 15.7%、「あいさつをかわす程度」が 40.8%であった。女性の方が近所づきあいが得意な傾向にあることがわかる。

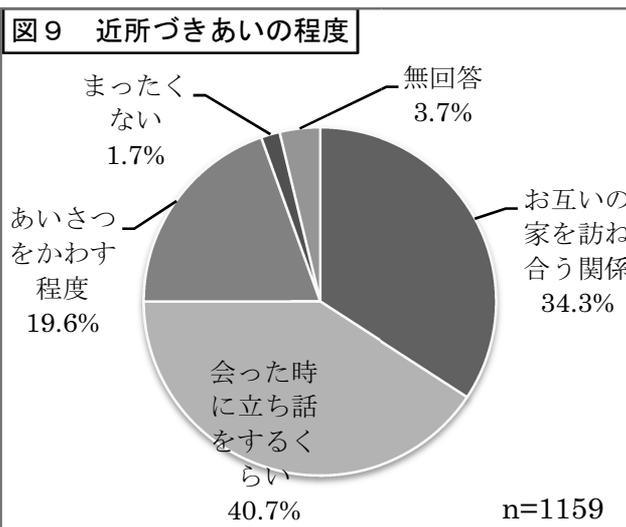


表9 近所づきあいの程度×性別

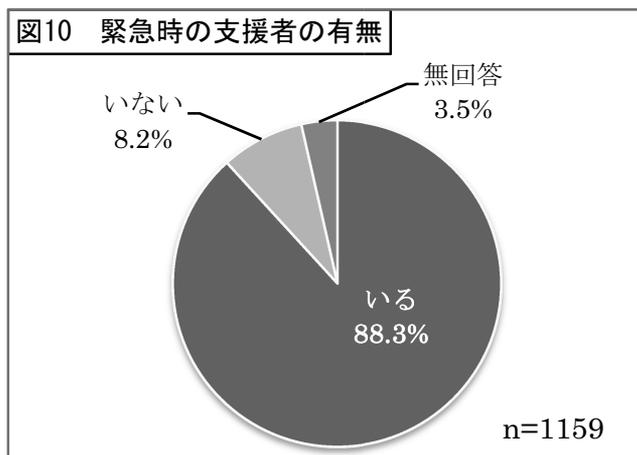
近所付合いの程度	性別			
	男性		女性	
	実数	%	実数	%
お互いの家を訪ね合う関係	35	15.7%	359	40.5%
会ったときに立ち話をするくらい	86	38.6%	385	43.5%
あいさつをかわす程度	91	40.8%	134	15.1%
まったくない	11	4.9%	8	0.9%
合計	223	100%	886	100%

* 無回答は欠損値として集計

(2) 88%は緊急時の支援者がいる

病気や身体の不調などの困ったときに支援してくれる人の有無についてたずねたところ、「いる」と回答した人が 88.3% (1,023 人)、「いない」と回答した人が 8.2% (95 人)であった。

1,159 人の回答者のうち、100 人近くの人が「緊急時の支援者がいない」と回答している。



(3) 緊急時の支援者がいる人は、近所づきあいが多い傾向

表 10 は、近所づきあいの程度と緊急時の支援者の有無との関係をみたものである。

緊急時の支援者が「いる」人は、「いない」人にくらべて、近所づきあいをよくしている傾向があることがわかる。

表 10 近所づきあいの程度 × 緊急時の支援者の有無

近所づきあいの程度	緊急時の支援者の有無			
	いる		いない	
	実数	%	実数	%
お互いの家を訪ね合う関係	380	37.9%	12	12.9%
会った時に立ち話をするくらい	429	42.8%	35	37.6%
あいさつをかわす程度	182	18.1%	38	40.9%
まったくない	12	1.2%	8	8.6%
合 計	1003	100%	93	100%

* 無回答は欠損値として集計

(4) 収入と緊急時の支援者の有無には関わりがある

表 11 は、年間収入（4 区分）別に緊急時の支援者の有無をみたものである。年間収入が「150 万円未満」の場合、緊急時の支援者が「いない」人の割合は 13.6%で、他の収入区分よりも割合が高いことがわかる。

表 11 年間収入区分（4 区分） × 緊急時の支援者の有無

緊急時の支援者の有無	年間収入区分（4 区分）							
	150 万円未満		150 万円以上 200 万円未満		200 万円以上 400 万円未満		400 万円以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
いる	304	86.4%	240	94.1%	376	94.5%	41	93.2%
いない	48	13.6%	15	5.9%	22	5.5%	3	6.8%
合 計	352	100%	255	100%	398	100%	44	100%

* 無回答は欠損値として集計

(5) 緊急時に駆けつけるのは、近親者が多い

緊急時に駆けつけてくれる人は誰かについてたずねた。

もっとも多かったのは「子ども（その配偶者、孫を含む）」で55.7%を占めた。次いで「兄弟・姉妹」が20.6%であった。

表 12 緊急時の支援者／種類

緊急時の支援者／種類	実数	%
子ども（その配偶者、孫を含む）	570	55.7%
兄弟・姉妹	211	20.6%
親戚	77	7.5%
近所の人	85	8.3%
友人・知人	53	5.2%
その他	14	1.4%
無回答	13	1.3%
合計	1023	100%

(6) 正月三が日を「子ども家族」と過ごす人は54%

正月三が日を過ごした相手については、「子ども（その配偶者、孫を含む）」と回答した人が54.0%を占め、「兄弟・姉妹」が10.1%、「ひとりで過ごした」人は30.6%であった。

子どもやその家族の存在が正月の過ごし方にも影響を与えることが傾向としてあらわれている。

表 13 正月三が日に過ごした相手（複数回答）

正月三が日に過ごした相手 (n=1159)	実数	%
子ども（その配偶者、孫を含む）	626	54.0%
兄弟・姉妹	117	10.1%
親戚	71	6.1%
近所の人	32	2.8%
友人・知人	61	5.3%
ひとりで過ごした	355	30.6%
その他	21	1.8%
無回答	29	2.5%

(7) 緊急時の支援者がいない人は、ひとりで正月を過ごしている人が多い

正月三が日に過ごした相手を、緊急時の支援者の有無別にみたものが表 14 である。

緊急時の支援者が「いる」場合、正月三が日を「子ども(その配偶者、孫を含む)」と過ごした人は 59.0%、「ひとりで過ごした」人は 27.6%であった。

一方、緊急時の支援者が「いない」場合には、正月三が日を「子ども(その配偶者、孫を含む)」と過ごした人は 20.2%、「ひとりで過ごした」人は 68.1%を占めた。

表 14 正月三が日に過ごした相手×緊急時の支援者の有無

正月三が日に過ごした相手（複数回答）	緊急時の支援者の有無			
	いる (n=1015)		いない (n=94)	
	実数	%	実数	%
子ども（その配偶者、孫を含む）	599	59.0%	19	20.2%
兄弟・姉妹	114	11.2%	2	2.1%
親戚	68	6.7%	3	3.2%
近所の人	31	3.1%	1	1.1%
友人・知人	55	5.4%	5	5.3%
ひとりで過ごした	280	27.6%	64	68.1%
その他	17	1.7%	4	4.3%

* 無回答は欠損値として集計

3 生活上の困りごとについて

(1) 生活環境の困りごとは、「お店がないこと」、「地震対策への不安」

現在の居住地における生活環境についての困りごとを複数回答でたずねた。

困りごととしてもっとも回答が多かったのは「近所に買い物をする店がない」で20.9%。

次いで「地震などの防災対策」が17.8%、「そばや寿司など店屋物をとる店がない」が11.9%、「防犯上の不安がある」が11.5%、「近所に外食する店がない」が9.7%であった。

「特に困っていることはない」と回答した人は43.1%であった。

表15 生活環境についての困りごと（複数回答）

生活環境についての困りごと (n=1159)	実数	%
近所に銭湯がない	74	6.4%
近所に外食する店がない	112	9.7%
そばや寿司など店屋物をとる店がない	138	11.9%
近所に買い物する店がない	242	20.9%
仲間・友人などと集まる場所がない	68	5.9%
訪問販売員が多い	48	4.1%
防犯上の不安がある	133	11.5%
近隣との関係	56	4.8%
地震などの防災対策	206	17.8%
特に困っていることはない	500	43.1%
その他	44	3.8%
無回答	78	6.7%

— 東京都港区調査(参考) —

同様の質問として港区の調査(2004年)では、「居住地の困りごと」としてたずねた。それをまとめたものが表aである。項目が異なるのでそのまま比較することはできないが、港区の場合、もっとも回答が多かったのは「防犯上の不安がある」で18.2%、次いで「近所に買い物する店がない」が12.4%であった。

「特に困っていることはない」と回答した人は47.2%であった。

表a 【港区】居住地の困りごと（複数回答）

地域の困りごと (n=964)	実数	%
近所に銭湯がない	63	6.5%
近所に外食する店がない	34	3.5%
そばや寿司など店屋物をとる店がない	44	4.6%
近所に買い物する店がない	120	12.4%
仲間・友人などと集まる場所がない	31	3.2%
訪問販売員が多い	52	5.4%
防犯上の不安がある	175	18.2%
近所に洗濯する場所がない	12	1.2%
近所に散歩する場所がない	18	1.9%
特に困っていることはない	455	47.2%
その他	101	10.5%
無回答	85	8.8%

出典:「港区におけるひとり暮らし高齢者の生活実態と社会的孤立に関する調査報告書」 港区社会福祉協議会、2006年。

(2) 「困りごとがない」と回答した人は、男性で56%、女性は44%

生活環境についての困りごとを、男女別でみたものが表 16 である。男性は、「近所に買い物をする店がない」を挙げた人が 13.3%、「地震などの防災対策」が 15.6%であった。また、「特に困っていることはない」と回答した人が 56.4%と半数を超えた。

女性では、「近所に買い物する店がない」を挙げた人は 24.7%にのぼり、ほか「地震などの防災対策」が 19.9%、「そばやすしなど店屋物をとる店がない」が 14.0%、「防犯上の不安がある」が 13.4%とそれぞれ男性よりも高い割合を示した。また、「特に困っていることはない」とした人は 43.7%で、男性よりも低い割合であった。

表 16 生活環境についての困りごと×性別

生活環境についての困りごと（複数回答）	性別			
	男性（n=218）		女性（n=858）	
	実数	%	実数	%
近所に銭湯がない	17	7.8%	57	6.6%
近所に外食する店がない	20	9.2%	91	10.6%
そばや寿司など店屋物をとる店がない	16	7.3%	120	14.0%
近所に買い物する店がない	29	13.3%	212	24.7%
仲間・友人などと集まる場所がない	12	5.5%	55	6.4%
訪問販売員が多い	11	5.0%	37	4.3%
防犯上の不安がある	17	7.8%	115	13.4%
近隣との関係	13	6.0%	42	4.9%
地震などの防災対策	34	15.6%	171	19.9%
特に困っていることはない	123	56.4%	375	43.7%
その他	8	3.7%	36	4.2%

* 無回答は欠損値として集計

(3) 日常生活の困りごととは、雪かき、買い物、外出が上位を占める

日常生活上の困りごとについて、複数回答でたずねた。

困りごととしてもっとも回答が多かったのは「雪かき」で 37.4%であった。そのほか、「買い物」が 16.7%、「バスや電車、車などを使っての外出」が 11.6%であった。

「特に困っていることはない」と回答した人は 39.9%であった。

表 17 日常生活での困りごと（複数回答）

日常生活での困りごと (n=1159)	実数	%
バスや電車、車を使って外出すること	135	11.6%
買い物	193	16.7%
掃除・洗濯	101	8.7%
食事の準備	92	7.9%
銀行預金などの出し入れ	60	5.2%
入浴	33	2.8%
区役所等での手続き	94	8.1%
通院・薬とり	84	7.2%
ゴミ出し	89	7.7%
雪かき	434	37.4%
特に困っていることはない	462	39.9%
その他	32	2.8%
無回答	77	6.6%

**(4) 困りごとの内容は、男性は「雪かき、食事の準備、掃除・洗濯」が上位
女性は「雪かき、区役所等の手続き」が上位**

表 18 日常生活での困りごと×性別

日常生活での困りごと（複数回答）	性別			
	男性 (n=213)		女性 (n=863)	
	実数	%	実数	%
バスや電車、車を使って外出すること	12	5.6%	122	14.1%
買い物	25	11.7%	167	19.4%
掃除・洗濯	29	13.6%	72	8.3%
食事の準備	48	22.5%	44	5.1%
銀行預金などの出し入れ	6	2.8%	54	6.3%
入浴	6	2.8%	27	3.1%
区役所等での手続き	5	2.3%	89	10.3%
通院・薬とり	10	4.7%	74	8.6%
ゴミ出し	12	5.6%	77	8.9%
雪かき	59	27.7%	369	42.8%
特に困っていることはない	106	49.8%	356	41.3%
その他	3	1.4%	29	3.4%

* 無回答は欠損値として集計

(前ページの続き↓)

日常生活上の困りごとを男女別にみたものが表 18 である。

男性は、13.6%の人が「掃除・洗濯」を、22.5%の人が「食事の準備」を困りごととして挙げているが、女性の場合、困りごととして「掃除・洗濯」を挙げた人は8.3%、「食事の準備」を挙げた人は5.1%であった。いわゆる「家事」については、男性の方が日常生活上の困りごとになりがちな傾向がみられた。

「買い物」については、男性の11.7%、女性の19.4%が困りごととして挙げていた。

「バスや電車、車を使って外出すること」については、男性が5.6%であったのに対し、女性は14.1%を占めた。そのほか、「区役所等での手続き」や「通院・薬とり」、「ゴミ出し」はいずれも女性の方が割合が高かった。「雪かき」については、男性では27.7%であったのに対し、女性では42.8%の人が困りごととして挙げていた。

また、「特に困っていることはない」と回答した人の割合は、男性は49.8%と半分を占め、女性は41.3%であった。

(5) 75歳以上では、区役所等の手続きが負担

日常生活上の困りごとを年齢階層別にみると、総じて年齢階層が高くなるほど、それぞれの行動を困りごととして挙げる人の割合が高くなり、「特に困っていることはない」と回答する人の割合が低くなっている。表 19 は、年齢階層を、「65歳以上 75歳未満」と「75歳以上」の2つに分類して、日常生活上の困りごとをみたものである。

表 19 日常生活での困りごと×年齢階層（2区分）

日常生活での困りごと（複数回答）	年齢階層 2区分			
	65歳以上 75歳未満 (n=298)		75歳以上 (n=775)	
	実数	%	実数	%
バスや電車、車を使って外出すること	29	9.7%	106	13.7%
買い物	22	7.4%	169	21.8%
掃除・洗濯	13	4.4%	88	11.4%
食事の準備	17	5.7%	75	9.7%
銀行預金などの出し入れ	6	2.0%	53	6.8%
入浴	6	2.0%	27	3.5%
区役所等での手続き	8	2.7%	85	11.0%
通院・薬とり	12	4.0%	71	9.2%
ゴミ出し	11	3.7%	77	9.9%
雪かき	95	31.9%	337	43.5%
特に困っていることはない	158	53.0%	300	38.7%
その他	5	1.7%	27	3.5%

* 無回答は欠損値として集計

(前ページの続き↓)

「バスや電車、車を使って外出すること」を困りごととして挙げた人の割合は、75歳未満では9.7%であったが、75歳以上では13.7%であった。「買い物」は65歳以上75歳未満では7.4%であったが、75歳以上では21.8%であった。

「区役所等の手続き」は65歳以上75歳未満では2.7%であったが、75歳以上では11.0%であった。「雪かき」は75歳未満では31.9%であったが、75歳以上では43.5%であった。

「特に困っていることはない」と回答した人の割合は、75歳未満では53.0%と半分以上を占めていたのに対し、75歳以上では38.7%であった。

(6) 困りごとを手伝ってもらうのは、「子ども家族」、「近所の人」、「兄弟・姉妹」が上位

日常生活で困ったことがあったときに、誰に手伝ってもらうのか、複数回答でたずねた。

もっとも多かったのは「子ども(その配偶者、孫など)」で、49.6%とほぼ半数の人が回答した。

次いで「近所の人」が25.5%、「兄弟・姉妹」が23.3%、「友人・知人」が17.1%、「親戚」は11.6%、「民生委員」は10.1%であった。

一方、「手伝ってもらう人がいない」と回答した人は5.3%であった。

表 20 困りごとを手伝ってもらう人(複数回答)

困りごとを手伝ってもらう人 (n=1159)	実数	%
子ども(その配偶者、孫など)	575	49.6%
兄弟・姉妹	270	23.3%
親戚	134	11.6%
近所の人	296	25.5%
友人・知人	198	17.1%
民生委員	117	10.1%
自治会長	33	2.8%
ホームヘルパー	95	8.2%
ボランティア	3	0.3%
役所の人	12	1.0%
病院の人	5	0.4%
ケアマネージャー	45	3.9%
まごころヘルプ	29	2.5%
手伝ってもらう人がいない	62	5.3%
その他	37	3.2%
無回答	75	6.5%

(7) 近所づきあいをよくする人は、困ったとき手伝ってもらえる人の選択肢が多い

「日常生活で困ったことがあったときに、誰に手伝ってもらうのか（複数回答）」を「近所づきあいの程度（2区分）」別にみたものが表21である。

ここでは、近所づきあいの程度を、「お互いの家を訪ね合う関係」と「会ったときに立ち話をするくらい」を合わせて「近所づきあいをよくする」とし、「あいさつをかわす程度」と「まったくない」を合わせて「近所づきあいをあまりしない」として大きく2つに分類してその傾向をみた。

近所づきあいの程度にかかわらず、「子ども（その配偶者、孫など）」が「困ったことがあったとき手伝ってもらう人」として、もっとも多いことには変わりはなかった。

次に、「近所の人」については、近所づきあいを「よくする」場合は32.8%、「あまりしない」場合には8.6%であった。また、「手伝ってくれる人がいない」人の割合は、近所づきあいを「よくする」場合には2.8%であったが、「あまりしない」場合には15.9%であった。

表21 困ったことがあったとき手伝ってもらう人×近所づきあい（2区分）

困ったことがあったとき手伝ってもらう人（複数回答）	近所づきあいの程度（2区分）			
	よくする（n=812）		あまりしない（n=233）	
	実数	%	実数	%
子ども（その配偶者、孫など）	458	56.4%	96	41.2%
兄弟・姉妹	197	24.3%	60	25.8%
親戚	110	13.5%	20	8.6%
近所の人	266	32.8%	20	8.6%
友人・知人	169	20.8%	26	11.2%
民生委員	95	11.7%	18	7.7%
自治会長	28	3.4%	4	1.7%
ホームヘルパー	66	8.1%	28	12.0%
ボランティア	2	0.2%	1	0.4%
役所の人	6	0.7%	4	1.7%
病院の人	4	0.5%	0	0.0%
ケアマネージャー	33	4.1%	11	4.7%
まごころヘルプ	24	3.0%	3	1.3%
手伝ってもらう人がいない	23	2.8%	37	15.9%
その他	30	3.7%	6	2.6%

* 無回答は欠損値として集計

B 自由記述の内容から

調査票の最後に、「区役所などの行政、社会福祉協議会等に対するご意見や、地域でのお困りごとがあれば何でもご自由に記入してください」という、意見記入の欄を設けている。調査回答者全体の2割強の278人の回答者から率直な意見が寄せられた。

自由意見の記入者と全サンプルとの基本属性を比較すると、性別、年齢、主観的な健康状態については、さほど差はみられなかった。住宅の困りごとの有無、ひとり暮らしのきっかけ、楽しみの有無、友人知人の有無、緊急時の支援者の有無、年間収入で多少の違いがみられた（表22 ※29頁参照）。

全体の意見については、①行政・福祉・医療サービスに関わるもの、②日常生活に関わるもの、③居住地域における生活環境に関わるもの、④不安の4つに分けられる。

1 行政・福祉・医療サービスについて

全体の3割が行政・福祉・医療サービスに関する意見である。その内容に応じて、民生委員に関するもの、社会福祉協議会に関するもの、行政に関するもの、社会福祉サービスに関するものに分けることができる。

(1) 民生委員に関するもの

「民生委員の方が毎月必ず様子をみにきて下さり、有難く思っております」（84歳女性）、「よく民生委員の方が声をかけてくれます。時々、自分から訪問し、主人と囲碁などをして楽しんでおります」（80歳男性）、「お隣さんが民生委員さんでもあり、町内でもわりと熱心に活動されている所と思いますので、こちらが困った時は教えていただけることと思います」（81歳女性）など毎月の訪問や相談に乗ってもらえる等、民生委員への感謝が多く挙げられ、何かあったときの情報源としての期待もあった。

その一方で、「民生委員の人はどの様にして選ばれるのか。民生委員の人がどの様な人柄かわからないので信用できないので家の中には入れたくない」（69歳女性）、「民生委員は個人差があるが、地域に於ける存在感はない」（85歳男性）など民生委員の人柄がわからないので不安というものも少数であったがみられた。

(2) 社会福祉協議会に関するもの

「社会福祉協議会等から年末になると町内の民生委員の方を通しておせち料理、毎月10日頃にヤクルトも届けて頂き誠に有難うございます」（77歳女性）、「毎月ヨーグルトや石けんを頂戴して、有難く感謝しております」など「おせち料理」や「ヤ

クルト」、「石けん」などが手渡されることへの感謝が挙げられている。

ただ、同じものでも「昨年初めておせち料理を頂き、先ずびっくりしました。単価が解らず判断は難しいですが、折角頂けるものでしたら、もう少し現実に即した内容量等、充実し本当に喜ばれるようなものにして頂けたら有難い」(81歳女性)、

「昨年配布された石けんを使ったところ全く泡立たず、軽石のようだった」(85歳男性)など訪問員が持参する物への不満も挙げられていた。

まごころヘルプについても感謝と同時にそれぞれの活動の制約についての要望が挙げられていた。その他、「社会福祉協議会の団体の名前は知っていますが、どのような活動をしているのか把握できていません」(74歳女性)など社会福祉協議会の活動が、具体的にどのように行われているかよくわからないという意見もあった。

その他、今回の調査実施あたって、「アンケートは無記名で行うことが望ましい。個人情報保護の意味で配慮していただきたい。面接調査の協力は別紙はがきにでも書いて提出するなど、工夫して下さい。調査結果は意識調査に協力した人達だけではなく、一人暮らしの人達全員に配布されることをお願いしたい。無記名であれば当然のことと思われるが、よろしくお願いします」(78歳男性)という建設的な意見が寄せられていた。※1次調査は無記名で実施、2次調査の同意者のみ記名

(3)行政に関するもの

「行政は地域住民の要請を早く処理してほしい。机に向かってばかりでなく現場に出てほしい」(76歳男性)、「手続きがよくわからないので、税務署や市役所に行くのは好きでない」(89歳女性)など行政での手続きの不満、「夫の死後、各種機関から手続きの書類が届けられましたが、今まで目にした事のない文字や文章で理解するのに苦労しました。それまでの不勉強の為なのも解っておりますが、平易な表現はできないものでしょうか」(74歳女性)、「市役所から年金その他のお知らせが多すぎます。多い時には週に何通も郵便が来ますが、個人情報等まとめていただきたいと思います。そのたびに切手をはり封筒に入れ郵便したりせず、急ぎでなければ、上記のように一個人まとめて送って下さい。税金が使われる訳ですから、その点もよく考えてください」(73歳女性)など、行政の簡略化、それによる経費の節約も挙げられていた。

また、「自分の町内で空き家等を市(行政)が借り上げて、高齢者が半日でもよいから協力し合って過ごせる場所があれば、自然と老人同士が話し合い(悩み)、助け合いなどが出来るのではないかと思います」(70歳男性)など、高齢者同士が交流できる場所の確保という要望もあった。

(4)福祉サービスに関するもの

「ひとり暮らしの年寄の淋しい気持ちを少しでも楽になる様な誰でも気楽に行ける様な施設があったらいいな。1日500円位で行ける様な施設がほしい。淋しい老人もひとり暮らしで話をできるような施設がほしい」(76歳女性)など気軽にいける施設や、「介護付ホームが沢山できてきているが、高くて入れない。低所得でも入れるような施設を作って欲しい」(78歳女性)など、安く入所できる施設の充実が挙げられていた。

生活保護制度については、生活保護が受給できていることで医療費が助かっているという声がある一方で、生活保護よりもこれまで払ってきた国民年金や厚生年金が低いことへの不満の声もあった。

2 日常生活について

日常生活については、全体で2割の人が意見を寄せている。生活不安、除雪、家事に関するものに分けることができる。

(1)生活上の不安について

「社会福祉の方に、一年位前まで、夕食の宅配をおねがいしていました。その時、配達して下さる方が時間と自分の氏名を書きながら、『元気でしたか』、『風邪引かぬよう』などなど、ひと声、ふた声かけて下さるのが、夕食の献立以上の、何よりもご馳走でした。杖をついてコンビニの弁当を下げている姿が店のガラスにうつる姿にがっかりして、今はパン(トースト)と牛乳か、チンしたゴハンを食べています。外の方々は自分で密かに夕食をとっているようで、私は自己責任、自立、自助したい老人(男やもめ)の泣き言とは思っていますが」(79歳男性)といった、ひとり暮らしの寂しさを記すものもあった。

「本人は認知症の為、ほとんど記入は出来ません。私(養子)が今面倒をみていますが、私自身(77才)、病気がちで全面的に援助出来ず、半分以上はショートステイを利用しています。気が強いので、すべて自分でしないと気がすまぬ様子ですが、近頃とみに認知症が進み、買い物はしているつもりですが危険でさせられません。父の後妻で、私の母が亡くなった後、相当年のとった父の後添に昇格した為、一人住まいが長いです。洗濯もしているつもりですがやっていません。近頃は近所のつきあいもほとんどなく、家にいる時はほとんど寝ています。食事は私が運びます」(91歳女性)という、認知症の義母を日中世話している方がその様子、状況を代筆しているものがあった。

(2) 除雪について

平成 22 年 2 月の大雪の影響で、除雪に関して多くの意見が寄せられた。住宅地や私道の雪、除雪車が通った後の雪の壁、歩道に積まれた雪など、除雪に苦労しそれによって、雪かきや雪道を歩いてケガをしてしまった、買い物やゴミ出しにも出られず家にいるしかなかったという意見が多かった。

具体的には、「除雪車の雪が玄関道路に高くつまれ困ります。体力ない老人です。除雪で何度も腰の痛みをおこしています」(79 歳女性)、「雪が消えた頃になると、とても歩きにくくて歩く事が出来ません。除雪しても歩けませんので、歩道にも雪を取ってもらえる様にしてくれる様をお願いします」(86 歳男性)、「冬、歩道の積雪、車道は除雪車が早朝除雪し、道路に雪を置いてゆく。歩行者は歩くところがないので、車道があるのがキケンである。老人はかいものに困る」(77 歳女性)

「今までも感じていた事ですが、玄関前出入り出来る様に除雪していても、そのあと除雪車が来て、壁が出来、出入り口をふさがれるので、又人が一人通れる程度にやっと道をあけていたが、それが今冬のように 5 日間連続では大変でした。目を追うごとに雪は固くなり、その固い雪壁を毎日あけるのは無理で、最後出入り出来なくなり困りました」(79 歳女性)、「今年の大雪の時、家の前は、近所の人が除雪してくれましたが、道路の除雪が悪く、ごみ捨てや買い物等で無理をして、足腰が急激に悪くなり、外に出る回数が減りました。大雪の時に高齢者でも安心して暮らせるような対策を望みます」(86 歳性別不明) などである。

(3) 買い物、ゴミ出しについて

買い物については、「町内に（近所歩いて 10 分位）あった、雑貨店が閉店してしまい（酒、野菜、冷凍物等）、歩いて 30 分以上のスーパーしか買い物が出来ない」(86 歳女性)、「近くに店がなく、非常に不便のため、小さくてよいので、スーパー的な店があるとよいと思う」(81 歳女性)、「日常の買い物に、現在は車で行けるが、車に乗れなくなった時、歩いて行ける距離にスーパー等が一つも無い。学校町周辺には個人店も無くなってしまった」(79 歳女性) という近くに買う場所がないというものが多かった。

買い物ができても「買い物がとても不便、重い物が持てないため、どうにかしてもらえないでしょうか。よろしくをお願いします」(84 歳女性) というものもあった。ゴミ出しについては、「朝のゴミ出しで体の具合が悪い時はどの様な援助があるのでしょうか。ゴミ出しは時間が決まっているのでヘルパーさんも難しいと思いますが…」(75 歳女性) という、ヘルパーの時間とゴミ収集時間が合わないことや、「足を

怪我した時、近所の方でも 1 週間位のゴミ出しを頼むのは抵抗を感じます。家の前に出しておけば、市の人が集荷してくれる様なシステムがあればと思いました」(79 歳女性) といった、ゴミ捨てを人に頼むことへの抵抗感もあった。

3 居住地における生活環境について

居住地における生活については、全体の 2 割の人が意見を寄せている。自治・町内会、近隣関係、生活環境などに分けることができる。

(1) 近隣関係

「現在住んで一番古いので近所の皆様とは仲良くしていきたいと思っています。上京の時、又留守の時など頼めますし、家が暗くても心配しないでねといろいろ頼んでいます」(78 歳女性) という近隣のつながりについて挙げられているものもある。その一方で、「町内の構成人員は、少子化現象が極端にあらわれ、子どもが極端に少なく、65 才以上の老人が多い。従って、町内行事などには支障を来し運営も出来なくなる」(85 歳男性)

「私の住んでいる町内では顔さえ知らない人が沢山いる。何の集まりもなくコミュニケーションがない。忘年会や新年会もなく、とても淋しく感じる。困った事ではないけども、少しはあった方が良い様な気がする。前に町内会長さんに聞いた事があるが皆さん年を取っているのだとの事」(66 歳女性)、「住んでいる町内はどんどん高齢化が進み、現在何とかやっている町内会の仕事、ゴミ出し、ゴミ当番等も体調不良になれば、一人暮らしでは、なかなか厳しいものがあります。回覧板も月一回位にまとめられないかと思います」(77 歳女性) という居住地の少子高齢化の状況、それに伴う近隣関係の希薄さが挙げられていた。

(2) 町内当番について

「年齢と体力には個人差があると思いますが、一応 80 才以上の一人世帯は『清掃当番』や『組長』を免除していただくと有難いと思います。高齢者の一人世帯が増えているので難しいと思いますが、年齢で区切っていただければ幸いです」(80 歳女性) という町内会の役職の免除のこと、「下水掃除について。今まではお隣さんと二人でしていたのですが、体の方が悪くなられて、私一人で掃除していたのですが年をとってきて手も痛くなり下水の重いフタを上げられなくて大変です。私自身、最近急に大雨になる事が多く心配なので、毎年のように下水掃除は必ずきれいに風が吹くと落ち葉がいっぱいになり、つまっていますので時々見るように心がけております。重い下水のフタを上げて頂くようお願い出来たら嬉しいです」(75 歳)

女性)、「年何回かの町内側溝清掃について。住民に高齢者が多く、作業が重く、負担になってきた。市の街清掃等で強力なバキュームカーなどで吸引清掃してもらおうと助かる。一人暮らしの女性でも一軒から一人出なくてはならない」(72歳女性)など側溝清掃の負担について挙げられていた。

(3) 移動手段 (バス) について

「元々少ないバスが4月から更に少なくなり悲しいです。赤字路線ですから仕方ないとは思いますが、乗る人が多い場所とか、県庁行きのバスは新しい車輛で昇降のステップが低いものが殆どですが、京王のバスは旧式が多く、膝が悪い老人には大変な思いをしています。市民病院が遠くなり、バス停も遠く不便です。タクシーに乗る余裕はありません」(79歳女性)、「外出の手段は主にバスですが、バス代が高く、ついつい回数をへらしたりする。郊外線は特に。このバス代、行政で何とかしてほしい」(69歳女性)などバスの利用が不便になっていること、バス代を高く感じていることなどが挙げられている。

(4) 居住地域における交流の場について

「地域で少し手助け、話し相手、会話等がしてほしくても、声を出せない方がいると思うので、どなたでも気軽に立ち寄れる、しかも徒歩で行ける、そんな場所があったらと思います」(66歳女性)、「地元の中心街に、年老いた人達が休憩する場所があるといいと思っています」(83歳女性)という、地域の人がつながることができる、交流できる場を望んでいるものもあった。

4 不安について

(1) 経済的な不安

「今は生活しているけど、大きな病気になった時にお金の事が心配。もっと年をとって生きていたら、老人ホームに入れるのか色々と考えてしまいます」(69歳女性)、「病気のため働けず、預金で暮らしています。今後の事が心配です。預金は残り少なく、子どももいませんので、常に先の事を心配しております」(64歳女性)。

(2) 緊急時に支援者がいない不安

「病気、夜中など急に具合が悪くなった時に身内が近くに居ないので救急車を呼ぶ以外に方法がないのが不安です」(82歳女性)、「この地区には一人暮らしの老人が多く、買い物にも行けない状態の老人もいました。こんな時火災発生があった

ら大変と思いました。この地区には専門学校、大学が多く、若者の多い街だと思います。その方に力をお借りしたいです」(75歳女性)、「一人なので万一の時、市のどこへ連絡すれば、なんとか手助けしていただけるのでしょうか」(76歳女性)。

(3) 要望

「一人暮らしの高齢者です。子どもは県外に住んでいます(永住のため新潟には帰れません)。私が今病気になったり、認知症になったらと考えるとゾッとします(出来ればずっと新潟にいたい)。友人達も互いに高齢状態であてにならず、各々が同じような心配をしています。いざとなったら具体的にどうするか知識が少ないからとも思いますが、新潟市の老人が安心して老いていられる知識を!先輩たちのよい具体例を多く多く知りたいと思っております。」(74歳女性)

「今後更に高齢化した時に、病気等で、自宅で一人暮らしができなくなったらと思うと、大変不安に思っています。将来の不安に対して具体的な対策(例えば、特養ホームの現状、手続き等)を考えるうえでの資料や説明(会)を配布願います」(68歳女性)。

表22 自由記述記入者と全サンプルの基本属性比較

	自由記述	全サンプル
総数	278	1159
	%	
(性別)		
男性	21.9	20.1
女性	77.7	79.3
(年齢)		
75歳未満	29.1	27.1
75歳以上	70.1	72.0
(主観的な健康状態)		
非常に健康である	6.1	6.2
まあまあ健康である	59.7	61.2
あまり健康ではない	22.3	22.7
健康ではない	9.7	8.5
(住宅の困りごと)		
ある	57.9	49.2
ない	36.0	44.4
(ひとり暮らしのきっかけ)		
死別	65.1	69.5
離婚	6.1	8.0
子の独立	7.9	7.5
未婚	14.7	9.9
その他	4.0	3.4
(楽しみの有無)		
ある	85.6	70.9
ない	9.4	16.0
(生存子の有無)		
いる	70.5	72.8
いない	25.5	22.6
(友人・知人)		
いる	90.3	85.9
いない	7.6	10.9
(近所づきあいの程度)		
お互いの家を訪ね合う関係	34.2	34.3
会った時に立ち話をするくらい	43.5	40.7
あいさつをかわす程度	18.3	19.6
まったくない	1.1	1.7
(緊急時の支援者)		
いる	85.3	88.3
いない	10.8	8.2
(経済状況)		
かなり余裕がある	2.2	2.6
やや余裕がある	14.7	15.4
余裕はないが生活していくには困らない	59.4	59.7
やや苦しい	14.4	13.0
かなり苦しい	8.3	6.5
(世帯収入)		
150万円未満	28.4	31.1
150～400万円	61.9	56.9
400万円以上	43.9	38.5

C 2次調査の結果から

1 類型化の考え方について

ひとり暮らし高齢者の生活実態により迫るために、1次調査とあわせて訪問面接調査を実施した。実施にあたって1次調査の項目を指標として類型化した。その指標として、「緊急時の支援者の有無」と「近所づきあいの程度」を用いた。その理由として、多くの場合、生命と生活の再生産は、家族を単位として行われている。そのため病気や身体の不調など困った時にすぐ来てくれるという「緊急時の支援者」として、家族・親族が期待され、支えられると考えられてきた。実際、1次調査では、「緊急時の支援者」が「いる」と回答した人の83%は、「子ども」「兄弟・姉妹」「親戚」で、家族・親族がその人の生活に大きな役割を担っていることがわかる。

加えて、生活は、特定の地域社会という場のなかにおいて営まれているので、地域との関係も生活を規定する条件になる。そこで、地域との関わりを示す「近所づきあいの程度（2区分）」をもう1つの指標とした。

これら2つの指標をもとに、世帯を大きく4類型して、それぞれの抱えている課題、成り立っている条件についてみていくことにする。また、従来の条件に捕らわれないもの、生活を成り立たせている様々な条件についても、明らかにしたい。

表 23 2次調査対象者抽出の類型化と抽出ケース数

		近所づきあいの程度	
		あまりしない	よくする
緊急時の支援者	いない	類型1 (46) 6 ケース	類型2 (47) 9 ケース
	いる	類型3 (194) 18 ケース	類型4 (809) 16 ケース

※ () 内の数字は、全体における該当ケース数で、 () 外の数字は2次調査で訪問聞き取り調査をすることができたケース数である。

まず、類型を大きく把握するために、1次調査の結果から、それぞれの類型の特徴をみていきたい。データ数に偏りがあるので、試論としてみていきたい。

(1) 類型1 緊急時の支援者「なし」×近所づきあい「あまりしない」

男性が半数近くを占めている。生存子が「いない」人が半数、家族・親戚とのふだんの行き来についても「誰ともほとんど行き来がない」が半数近くを占めている。行き来のある家族・親族が「いる」と回答している人も半数が所在地は「県外」で

あった。近所の人による家事支援への抵抗感は、4分の3以上が強く感じている。抵抗感の理由としては、「人に迷惑をかけたくない」、「わずらわしいから」という回答が上位になっている。4分の3以上の人が生活上何らかの困りごとがあるが、半数近くは困ったことがあったとき手伝ってもらう人がいないと回答している。

また、「毎日外出している」など外出の頻度が高い人であっても、「ほとんど話をしない」が3分の1以上であり、友人・知人が「いない」人が半数を占めている。

所得階層は150万円未満が半数を占め、住居形態は民間賃貸が間借りを含めると3分の1を占めている。困りごととしては家の老朽化に加えて、「風呂がない」が一定数いた。このように類型1は、男性、子どもが「いない」、低所得階層の比率が高く、加えて、困ったことがあったとき手伝ってもらう人がいないという回答も高いという特徴がみられた。

(2) 類型2 緊急時の支援者「なし」×近所づきあい「よくする」

類型1との類似点は、生存子「いない」が半数以上で、親族とほとんど行き来がない人が3分の1を占め、親族との関係があまり強くないことである。親族と行き来がある場合でも市外や県外の比率が高く、連絡の頻度も「月に数回」の人が半数を占めている。

ひとり暮らしのきっかけは「未婚」の人が3分の1を占め、他と比べると高い。所得階層は150万円未満が半数を占め、住居形態は民間賃貸が4分の1を占めている。また、近所に家事を頼むことについてほとんどの人が抵抗感があると回答し、その理由は「人に迷惑をかけたくない」であった。類型1と比べると友人・知人が「いる」比率が高く、具体的には「近所の人」が半数を占めている。

類型1と異なる点は、女性が3分の2以上を占めていることで、女性比の高さは類型4に次ぐ大きさになっている。近所との関わりは、類型1よりも遥かに高い。このように類型2は、女性比率が高いことが特徴である。家族・親族との関わりは少なさ、低所得層の比率の高さは類型1と似ていた。

(3) 類型3 緊急時の支援者「あり」×近所づきあい「あまりしない」

類型1,2と異なる点は、生存子が「いる」比率が3分の2と高いことである。緊急時の支援者としては、子どもが半数、兄弟・姉妹が3分の1である。困ったことがあったときに手伝ってもらう人も子どもが半数、兄弟・姉妹が3分の1を占めている。所得階層は200万円以上が半数近くを占め、類型1,2と比べると所得が高い層が多い。その一方で友人・知人が「いない」という回答が3分の1を占めて、こ

れは類型2よりも高い。

また、「友人・知人」がいる人のなかでは、「趣味の仲間」が3分の1、「職場の人」が4分の1であった。行き来する親族については、徒歩圏内と区内を併せると3分の1以上、市内を含めると4分の3を超える。親族との連絡の頻度も週に数回以上が半数以上を占めている。また、居住地域における生活環境で困りごとがないが半数、日常生活の困りごとについてもないが半数を占めている。類型3は、類型1に似て男性の比率が高いことも特徴である。

(4) 類型4 緊急時の支援者「あり」×近所づきあい「よくしている」

女性がほとんどを占め、回答者の女性全体でも類型4が4分の3以上を占めている。主観的に健康な人が多く、専業主婦の比率が高い。主な交通手段としては徒歩よりもバスが多く、タクシーも一定数いる。友人・知人の種類は、近所の人が半数で、近所の人による家事援助への抵抗感については、「ない」が3分の1を占めている。他の類型では近所の人による家事援助への抵抗感がないという回答は4分の1にも満たないので、近所づきあいがいい人ほど近所の人による家事援助に抵抗感があると考えられる。また、緊急時の支援者は、子どもが半数以上を占め、困ったことがあったときに手伝ってもらった人としても子どもが半数を占めている。住宅の困りごととしては「固定資産税などの負担が大きい」が3分の1を占めていた。

これらのことから、近所づきあいの程度については、男性で「あまりしていない」が多く、近所づきあいについては性別で大きな違いがみられた。しかし、緊急時の支援者の有無については、性別よりも親族との関係や社会環境によるものが大きいと考えられる。加えて、近所づきあいをあまりしてなくて、緊急時の支援者がいないところがより不安定で、生活問題を抱えやすい傾向がみられた。

2 2次調査回答者から抽出した事例より

ここでは、ひとり暮らし高齢者のそれぞれの事例について、類型ごとにみていきたい。

(1) 類型1（緊急時の支援者「なし」×近所づきあい「あまりしない」）

・多趣味で積極的な関わりがあるが、「自宅に人が3人もやってきたのは3年ぶり」。

77歳男性は、妻と別居していて、子どもは2人とも県外。別居中の妻とは関係が良好で年に数回行き来がある。子どもともメールで連絡をしている。近所に気心の知れた元同僚も住んでいて、その他「社交ダンス」やコミュニティセンターにも積極的に通っ

ている。以前は自治会長を務めたこともあるが、「自宅に人が3人もやってきたのは3年ぶり」という。

また、多趣味ではあるが、「誰かが誉めてくれたり、お茶をいれてくれたりということがないので寂しい」と感じている。そして「今後もこの生活を続けていきたいが、孤独死して近所へ迷惑はかけたくない」と考えている。それでも「デイサービス」などの施設を利用することは、一律の食事を食べなければいけないことを理由に、よく思っていない。それなりに家族や近所とのつきあいはあるが、本人は緊急時の支援者はいないと考えており、「孤独死」への不安を口にしていた。

・介護保険、社協、配食など様々なサービスを利用している。

83歳男性は、妻とは死別し、子どもは2人県内と県外にいる。「4年前ぐらいから子どもから日曜日の8時に電話がかかってくるようになった」。孫と正月を過ごすこともある。

要支援2で、デイサービスを週2回、ショートステイを月2回利用している。そのほか社会福祉協議会の「まごころヘルプ」を週2回、配食サービスを1日2回利用している。経済的には余裕がある。近所づきあいはほとんどなく、社会参加活動にもほとんど参加できず、外出は週に1回以下。民生委員の訪問が月1回程度ある。日常生活での困りごとは「雪かき」「買い物」で、緊急時の対応について不安を抱えていた。将来的には、「介護つきマンションや施設への入所」を検討している。

・近隣とのつながりはなく、これからも近所に頼ることはない。県外にいる子どもとの同居を望んでいる。

79歳女性は、夫と死別し、子どもは県外に1人いて年に数回行き来がある。自宅の2階は子どもが利用できるようになっている。兄弟・姉妹は、新潟市内にはいないが、連絡をとっている。若い頃から子どもを越境入学させるなど近所の人たちとはあまり交流を持ってきておらず、「最初から近隣とのつながりはなく、これからも近所に頼ることはない」と考えている。

学生時代の友人や趣味活動の友人と月に1回食事会をしている。「10年前に亡くなった夫が座っていた椅子を今も片付けられないでいる」という。「体が動かなくなったら、（県外に住む）子どもと二世帯住宅で暮らしたい」と考えている。

・親族とは断絶しているが、友人は多い。将来は「ケアハウス」を希望。

77 歳女性は、自身の病気の発症を契機に、子ども、妹、親戚など親族と断絶の状況になり、現在家族・親族と誰とも行き来がない。近所には同世代の人が住んでおらず、あいさつ程度。編み物やウクレレ、ダンスなど複数の趣味の活動に参加をしており、友人は多い。

「周りの方が亡くなられており、死の順番が近くなってきた」と思っている。亡くなったときのことを考えて、情報収集をしている。将来的には、ある程度自活のできる「ケアハウス」への入所を考えている。

(2) 類型 2（緊急時の支援者「なし」×近所づきあい「よくする」）

・妻が特養に入所中。趣味の交流を深めたいが相手が少ない。

71 歳男性は、妻が特別養護老人ホームに入所している。子どもは県外に 1 人いて、年に 3 回家に帰ってくる。近所には班組織があり葬祭の手伝いをしていて、その付き合いはあるが、親交の深かった隣の方とは、その奥様が亡くなられてからあいさつ程度になってしまった。

また、妻の病気のこと、近所の人から精神的に追い詰められることもあった。最近はそのようなことを言われなくなり気持ちも切り替わり、自身の趣味を楽しめるようになった。趣味を通して友人との交流を深めたいと考えているが、周りがありすぎて、将棋などの相手がいないこともある。墓地は用意してあるが、墓を守ってくれる人がいないので、共同墓地にしようと考えている。

・親族との行き来は少ない。近隣との関わりはあるが深くはない。

73 歳女性は、夫と死別、子どもはいない。姉が市内にいるが高齢のため気軽に頼みごととはできない。姪も市内にいるが行き来はなく、安否確認する程度の付き合いになっている。入院の際保証人を立てるのに苦労したこと、行政からの情報もわかりにくいことなどを訴えていた。町内の活動には誘いがあれば参加していて、町内の旅行にも行くことがあるが、深い関わりはない。

外出状況は、家に閉じこもるようになったら終わり具合が悪くなければ、天気の良い日に自転車を出かけている。行動範囲も古町から小針までと広めで、「大和」がなくなって不便に感じている。自転車で買い物に本町へよく行っている。お風呂は、週に 3 回コミュニティセンター、週に 1 回銭湯へ行っている。趣味の仲間と親しくしている。今後については、「人の世話にはならないようにそればかりと考えていて」、有料老人ホームの利用を考えている。しかし、利用料が高いことに不満を感じている。

・何かあったときは町内会長へ。

79 歳女性は、夫とは死別して、子どもが 1 人県外にいる。市内に親戚がいて、時々訪ねたり、甥っ子が家に寄ったりする。近所との関係は良好で、近くに長年付き合いのある方がいて、週に数回交流している。大雪のときは近所のお世話になり、何かトラブルがあったときは町内会長に声をかけてもらっている。

ただ、以前不審者に家にあがられたことがあって、訪問販売などに対する不安がある。そのこととあわせて、ひとり暮らしのさびしさと不安がある。子どもが新潟に帰ってきてくれたらという思いがある。

・シングルマザーの娘家族を支える。娘の住居費や食費、家事全般を支援。

73 歳女性は、夫と死別して、子ども 2 人は新潟市内にいる。次女はひとりで 2 人の子どもを育てている。そのため週末は、次女の家で家事をしに行ったり、次女や孫と一緒に外食に行くこともある。次女家族の住居費や食費の支援をしている。民生委員が頻繁に訪れ、民生委員の奥さんがおかずを作ってくれることもある。その他近隣の人のなかには合わない人もいるが、近所の人々の雪かきをするなど町内の協力体制がある。

しかし、近所からの家事援助については抵抗感がある。次女との同居は考えておらず、住み慣れた自宅での生活を考えている。収入は遺族年金と基礎年金。貯金を取り崩して生活している。そのなかで、娘のマンションの頭金を支払った。

・近隣とは疎遠、行きつけの床屋と食堂がよりどころ。

77 歳男性は、22 年前に離婚してそれから 1 人である。子どもは市内と県外にいるが、ほとんど連絡がない状態。家はアパートで 8 年前から住んでいる。近所とはあいさつをする程度で「近所の葬式にも参加しないし、隣の人が亡くなっても気づかないぐらいの関係にある」という。昔から仕事一筋であったため、地域の活動や趣味の活動は今も昔もしていない。

「月 1 回の通院の帰りに昔住んでいた所にある行きつけの床屋さんや食堂に寄って話しをしたり、外食することを楽しみにしている。以前は知り合いが夫婦で訪問してくれたが、ここ 2 年は来ていない」という。左半身に麻痺がありリハビリのために歩くようにしている。買い物は歩いて 10 分のスーパーに 2 日に 1 回行く。歩けなくなればヘルパーを頼むことも考えているが、お金がかかるので生活ができなくなると思っている。そのためいまも介護保険の申請をしていない。もしものことは考えないようにしており、「倒れたらそれまで」という。

(3) 類型3（緊急時の支援者「あり」×近所づきあい「あまりしない」）

・日常的に子どもからの支援があり、近所の人と顔を合わさないが良好の関係。

84歳女性は、夫と死別。介護保険を利用して、週2回デイサービスに行き、週2回ヘルパーに来てもらっている。子どもが2人いて、長男は区内、長女は県外にいる。長男からは日常的な支援があり、長男夫婦が庭の手入れや日用品の購入、洗濯の手伝いなどをしてもらっている。長女も月に1回泊まりに来る。

近所づきあいは、近隣清掃は免除してもらっていて、回覧板は隣の人がコピーを郵便受けに入れてくれて、次の人に回してくれるなど、外出をしないので、顔を合わすことが少なくなったが良好な関係にある。ただ、近所の目を気にして「朝早く電気をつけたり、夜早くに電気を消さないようにしている」という。

また、近所の茶話会などに参加しているが、「動けなくなってから友達とお茶のみができなくなった」と話されていた。訪問販売が多く、いつも鍵をかけるようにしている。

・日常的に子どもからの支援あり、「人との触れ合いを求めた」外出をする。

86歳男性は、妻の介護をして看取った。子どもは2人いて、ともに市内にいる。長男は徒歩5分のところに住んでいて仕事帰りに毎日顔を見に来る。長女とは一緒に旅行に行く。経済的には余裕があるので孫に仕送りをしている。

近隣との付き合いはほとんどなく、あいさつもなし。民生委員から月に1回の訪問があり困っていることを聞いてもらっている。コミュニティセンターの「お茶の間」に誘われたことがあるが、仲間がいなく1回で行くのをやめた。毎日買い物にはでかけるようにして、「人との触れ合いを求めて」駅まで行くこともある。将来、具合が悪くなったら、施設に入りたいと考えている。でも本当は、長男家族に同居してもらいたい。迷惑をかけたくないので、「ころっと死ねれば」と考えている。

・居住地域・生活環境は快適だが、近隣との交流関係はない。

77歳男性は、8年前にマンションに越してきた。家の中はバリアフリー。越してすぐに妻は亡くなった。妻の妹が同じマンションに住んでいて、旦那を亡くしひとりだけで、たまに顔を合わす。子どもは1人、中央区内に家がある。いまは単身赴任で県外に出ているが、週に1回電話があり、お正月は息子家族と一緒に過ごす。

マンションの環境はよく、スーパーやデパートも近くにあり、大雪で支障が出ることもなく生活面では困っていない。しかし、近隣との交流がないので、寂しく孤立感があるという。入居者同士の交流が持ちたいと思っている。経済的には余裕がある。健康のことを考えて、毎日外出している。行動範囲として歩いて30分の距離ならば遠く感じ

ないという。いまは、生活面での心配はないが、災害時の対応や急に容体が悪くなったときの対応に不安を抱えていた。

・裏に住む人が生活を支えている、収入が少ないことが一番の不安。

83歳女性は、夫を40代で亡くし、女手ひとつで子ども3人を育て、義理の母も看取った。長男が県外にいて、ふだん連絡はないが年に数回は家に来る。長女は市内にいてたまに顔を出す。墓の掃除は長女に任せている。次男とは連絡を取っていない。近隣関係は、8年前までは町内の役などもやったことがあるが、いまはあいさつ程度。同じ敷地内の部屋を79歳の男性に貸していて、その人がゴミ捨て、古紙回収、庭の手入れ、雪かきなど身の回りのことをしてくれている。

以前自宅で倒れたときに、食事の用意から通院の付き添いをしてもらい、緊急時の支援者として考えている。日常生活の困りごとは、収入が少ないことで、国民年金と集金の収入でやりくりしている。お風呂は徒歩15分のコミュニティセンターに週3回行っている。そこで顔なじみの友人と話をするのが楽しみだが、食事に誘われても外食費がかかるので行かないようにしている。食事は自炊で1日0.5合。ふだんは家でテレビを観ている。友人と月1回茶話会を持ち回りで行っている。

そのなかで身近で起こった「孤独死」の話を聞き、自分自身が倒れた時を不安に感じている。国民年金受給者でも入所できる高齢者施設をつくってほしいという要望を挙げた。

(4) 類型4（緊急時の支援者「あり」×近所づきあい「よくする」）

なお、類型4については、対象を限定するために、「所得階層」「生存子の有無」を抽出の視点に加えた。ここでは、「生存子のいない」世帯のみについてみている。

・いまは友人との交流があるが、周りが亡くなり交流が減っていくことが不安。

64歳女性は、生まれてからここで暮らしている。古い住宅街の木造2階建て。未婚。50代半ばまでお店を営んでいた。病気で仕事は辞めた。いまは、預貯金でなんとかなっているが、医療費の出費が大きく、今後が不安。生活保護も考えている。

民生委員とは仲がよく、友人との交流もあり、趣味も多い。ひとりの生活には慣れているが不安があり、民間警備会社のようなシステムの導入を行政に無料でしてほしいという要望を挙げられていた。いまは、交流が多くいいが、友人が高齢で亡くなっており、今後、交流がなくなっていくことが心配。

・姉妹を頼って新潟に移住。自分の死んだ後が心配。

80歳女性は、14年前に購入した分譲マンションで暮らしている。子どもはいない。出身は長岡で、結婚を契機に東京で暮らしていた。夫が要介護になったことで、姉妹を頼って新潟に移り住んできた。姉と妹が市内に住んでいて、それぞれの誕生日には必ず会って食事をするようにしている。マンションの住民なかで、おかずを持ってきたり、家具のやりとりをしたり、町内会の行事に誘ってくれるなどのつきあいのある人が4人いる。

町内会の行事にはなるべく参加するようにしているが、うまく会話ができず友達ができないという。また、東京での暮らしが長かったので昔からの友人も新潟にいないという。収入は年金のみ、経済的には苦しいと感じている。趣味で絵を描いていて、習いに行きたいと思うが、月謝や付き合いなどを考えて、行くことができないでいる。自分が死んだときのこと、家財道具の処分や仏壇などについて心配していた。これらを整理して施設に入所して、施設で亡くなりたいという。

・困ったと感じると周囲からの支えがあり、困った状況にはならずにきた。

95歳女性は、子どもはいない。姪が市内に住んでいて週に3回来てくれる。要支援2で、ヘルパーを週1回、デイサービスを週1回利用している。掃除や力仕事をヘルパーに頼む。用事があるときはタクシーで移動し、徒歩5分でもタクシーを利用する。困ったと感じると周囲からの支えがあり、困った状況にはならずにすんでいる。

隣の家の人がよくしてくれている。ゴミ捨て、買い物など声をかけてくれる。以前は3日に1回おかずを持ってきてくれた。知り合いの人が病院に連れて行ってくれたりする。お互い体調が悪く、家への行き来はなくなった。里親になったり、難民救助の団体やホームレス支援の団体に寄付をしてきた。最期は献体を希望している。

・“mixi”(ミクシー)など広い交流関係を築いている。近隣とも交流あり。「行政が頼り」

83歳女性は、結核のため、仕事に就くことができなかった。子どもはいない。要支援1。週に1回ヘルパーに掃除をしてもらう。食事は、生協の宅配サービスを利用している。

マンション内では、同世代で「安心連絡ラブコール」というしくみを利用して、毎日必ず9時に電話で安否確認をし合っている。両隣とも交流がある。“mixi”などインターネット上でも広い交流関係を築いている。「親類に甘えられない状況のため、行政を頼りにしてきた」という。

3 困りごとについて

ここでは、2次調査で挙げられた具体的な困りごとについて、その内容を取り出して紹介したい。内容については、(1)日々の困りごと、(2)将来の不安に分けて、整理した。

(1) 日々の困りごと

・日常的な困りごと

「電球の取り替え、高いものをとること」(76歳女性)、「足下が不安で、電球を代えられない」(73歳女性)という、体力的な衰えとあわせて、それまでパートナーがやっていたことへの不安がみられた。「リウマチのため手が挙がらないので、洗濯物を干すのが大変。ビンのふたやキャップなど開けられないときは近所の人に頼んで開けてもらうが、ゴミ捨てだけは人に頼みづらい」(68歳女性)、「掃除。特にコタツが重い。掃除でヘルパーを利用したいと思っているが、近所の目を気にして、利用をためらっている」(88歳女性)という病気や加齢によって家事が思うようにできないこと、ゴミ捨てや掃除などを近所の人やヘルパーに頼むことへ抵抗感、周りの目を気にしている様子がみられた。

・訪問販売、防犯体制について

訪問販売の多さや防犯体制への不安が多く挙げられた。特に女性が多く、「1年前に、不審者2人に家にあがられた精神的なショックが大きく残っている。それ以来訪問販売などへの不安が大きく、鍵を閉めるようにしている」(65歳女性)、「商売の人がよく来るので、いつも鍵をかけている」(84歳女性)という声があった。男性でも「布団などの訪問販売がうるさいので、午前中は玄関を閉め切っている」(91歳男性)という声があり、訪問販売によって閉め切りをしているという様子もみられた。

また、防犯上の不安ということで、「防犯上不安があり、近所は寂しいので、警察にまめに姿をみせてほしい」(78歳女性)といい、この方は「防犯上、人がいるようにみせるため、できるだけテレビをつけている」という。その他、「訪問販売が多く断り切れず受けてしまう」(74歳女性)という方もいた。警察が「週に1回家に立ち寄って、注意喚起」(79歳女性)している。

・買い物について

買い物については、今はできているが、今後が不安というものがあった。「買い物は歩いて15分のスーパーに行っている。足に少し痛みもありいまは困っていないが、今

後の買い物に不安がある」(73歳女性)、「ふだんは徒歩10分のスーパーに行っている。歩けなくなれば、ヘルパーに買い物を頼まないとならないが、お金がかかるので生活できなくなると思っている」(77歳男性)というものがあり、徒歩で10分、15分というのも不安な範囲であることがわかる。

・経済的不安について

限られた収入による制約と支出を切り詰めている状況が示されている。そのなかで、「固定資産税」の大きさも経済的な不安の一因となっている。「収入がなく、貯金を取り崩しての生活のため不安が大きい。家賃3.2万円。通院は徒歩。市の風呂券を使い、入浴は週に1回。節約をしている。敬老の祝い金として市から5,000円、町内から2,000円いただき、涙を流して喜んだ」(78歳女性)、「会社の倒産によって年金が少なく、収入は2ヶ月20万円の年金だけ。食費、ヘルパー、リハビリの費用でギリギリの生活をしている。冠婚葬祭が一番の出費で、ないときは借りてでも払わなければならない。兄弟・姉妹も年金生活者で、姉は認知症であり、頼ることができない」(80歳女性)など、不安定な経済状況とそれによる節約の状況が語られている。

固定資産税についても多く挙げられており、「自分の年金5万円と遺族年金10万円の月15万円での生活は大変。そのため外出が少なくなった。固定資産税の10万円(土地6万、家4万)を大きな負担と感じている。バス代がもったいないので、自転車が主な移動手段」(73歳女性)

「収入が少ないことが一番の困りごと。収入は、集金の仕事の1万円と国民年金の6万円のみ。固定資産税を年17万円支払っている。負担に思う費目は、社会保険料、固定資産税、薬代。洋服は買わず、昔のものを仕立て直して使っている。食材も見切り品を買っている。バスにはなるべく乗らずに、利用するのは雨のときだけ。コミュニティセンターの帰りに友達に食事を誘われることがあるが、外食費がかかるので行かない」(83歳女性)

「固定資産税など税金関係が予想以上に負担となっている(年11万9千円)。昔はもう少し余裕があって生活していたと思うが、現在は何を買うにも考えてしまう」(65歳女性)、「年金と遺族年金で月18万円の生活。頂き物のお返しなど意外と交際費がかかる。他にタクシー代と医療費がかかる。固定資産税18万円(年)が負担で、貯金を取り崩して支払っている」(83歳女性)など、年間に10万円、18万円という固定資産税を年金などの限られた収入から支出しており、その他の固定的な支出とあわせて、節約をしながら、支払っている様子がよくわかる。

(2) 将来的な不安について

2次調査では、「現在、及び今後の生活についての考え方」を尋ねている。ここでは、病院や施設、お墓、「孤独死」、そして献体のことが挙げられていた。

・入院について

「自分自身の入院の際、保証人をみつけるのに苦労した。子どもがなく、姉が市内にいるが高齢で頼みごととはできない。行き来があるのは県外にいる義理の娘」（73歳女性）は、「子どもがいなく、身寄りがないので、入院時の保証人がいないことが不安」（71歳男性）、「入院手続き、土地建物の処分、相続税などに不安を感じている」（81歳女性）。

・施設入所について

「出来る限り健康を維持して一人暮らしを続けたい。自宅に入れるうちは介護が必要になってもサービス利用して生活したいが、子ども達に迷惑かけたくないので施設に入りたい。自分が母親の介護で離婚するなど苦労したので子ども達には迷惑かけたくない」（71歳男性）、「具合が悪くなったら病院、施設に入りたい。本当は長男家族に同居してもらいたいが、迷惑をかけたくない。息子の嫁に世話されたくない。妻の介護の経験から大変さを知っており、ころっと死ねれば良いと考えている」（86歳男性）

「体調が悪くなったら、年金内でやりくりできる施設に早く入りたい。他人や身内に迷惑をかけたくない」（77歳女性）、「自分の死後について、毎日心配でたまらない。家財道具の処分や、仏壇のこと、全部整理して養老院に入りたい。施設でぼっくり逝きたい。整理してくれる業者がいるはず、費用面なども知りたい。初恋の人に会いたいと思っている。元気かどうかだけでも…」（80歳女性）

「人に迷惑をかけずに、いっぺんに死にたい。施設に入るとお金もかかってしまうため」（80歳女性）、「将来は面倒をみってくれる人がないので、有料でもいいので老人ホームに入る覚悟をしている」（80歳女性）。このように施設入所については、多くの人が口にしており、それだけ大きな不安となっていることがわかる。入所の理由として「息子の嫁に世話をされたくない」というのもあったが、多くが身内・近所に「迷惑をかけたくない」ということであり、それが、「施設入所したい」ということにつながり、入所することに「覚悟」ということもでていた。

・孤独死について

「病気になったとき、認知症になったときのことを考えると不安を感じる。身近で孤独死が起こり、妹に毎日連絡を入れてもらっている」（81 歳女性）、「友人との会話のなかで、孤独死の話聞き他人事とは思えない。倒れたときのことを考えると不安になる」（83 歳女性）というように、「孤独死」が身近に起こり、自分自身のこととして考えている様子が見られる。

それが、「4月から生協に加入した。配達したものが1週間そのままだったら何かあったと思って警察でも呼んでくれるのではないか」（68 歳女性）、「孤独死して近所へ迷惑をかけたくない」（78 歳男性）など、迷惑をかけたくない、近所へのシグナルとしての宅配加入も特徴的と考えられる。

そして、「孤独死について、起こるのは当たり前だと思っている。亡くなってから長期間見つからないのは問題だが、誰かがみていて死ぬのは難しいのではないかという思いがある」（75 歳女性）という声もみられた。

・お墓について

「自分がもし倒れても延命は望まないと、子どもに伝えてある。墓はないので、2年前に亡くなった夫の遺骨をまだお墓に入れていない。新潟市の市営墓地にでも入れようかと考えている」（78 歳女性）、「お墓はなく、業者に遺骨の行く末を頼む」（77 歳女性）、「佐渡に両親の墓があり、兄が墓守をしている。自分はでた人間なので、お墓はない。もしものことは考えていない。倒れたらそれまで。骨は牛乳瓶にでも入れてくれればよい」（77 歳男性）

「お墓は、長女が亡くなった時に購入、妻も自分もそこに入るだろうとは思っているが、墓を守ってくれる人がいないので、共同墓地にしようかと考えているが、結論は出ていない」（71 歳男性）、「先祖の墓の管理は弟に任せてあり、自分は樹木葬への登録をすませている。周囲になるべく迷惑をかけないようにと考えている」（68 歳女性）

・献体について

そして、最後に、献体について触れられている回答もみられた。「身近に献体を希望している友人がいる」（81 歳女性）という友人が献体するというものに加えて、「献体することになっている」（78 歳男性）、「最期は献体を希望」（95 歳女性）というように、ご自身が献体することになっているという声もみられた。

【資料】1次調査調査票質問項目

※M. A. は複数回答を指す

問1 性別・年齢

問2 現住所

問3 現住所の居住年数

問4 旧新潟市における居住年数

問5 居住形態

問6 (1)住宅の困りごとの有無
(2)住宅の困りごとの内容(M. A.)

問7 ひとりでの居住年数

問8 ひとりで暮らしのきっかけ

問9 主観的な健康状態

問10(1)介助の必要性
(2)介護保険サービスを利用

問11(1)最長職
(2)業種

問12(1)配偶者の最長職
(2)配偶者の業種

問13 現在の仕事

問14(1)食生活
(2)歯磨き
(3)入浴
(4)洗濯

問15 地域・環境について困りごと(M. A.)

問16 日常生活の困りごと(M. A.)

問17 困ったときに手伝ってくれる人(M. A.)

問18 外出の手段

問19 車の所有

問20 車の運転

問21(1)ふだんの外出の頻度
(2)外出の機会の少ない理由(M. A.)

問22 外出先で会話の機会

問23(1)社会参加活動(M. A.)
(2)社会参加活動に参加していない理由(M. A.)

問24(1)暮らしのなかの楽しみ
(2)その楽しみ(具体的な記述)

問25(1)生存子の有無
(2)生存子の数

問26(1)行き来のある家族
(2)その家族の居住地
(3)その家族との連絡の頻度

問27(1)友人・知人の有無
(2)それはどなたですか。

問28 近所づきあいの程度

問29(1)近所の人に家事を頼むことへの抵抗感
(2)抵抗感の理由

問30(1)緊急時の支援者の有無
(2)その種類

問31 正月を過ごした相手

問32 世帯収入(年)

問33(1)現在の収入(M. A.)
(2)主な収入

問34 経済状況

問35 自由記述

新潟市中央区ひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する
調査報告書【概要版】

発行年月 2011(平成23)年3月

発行 新潟市中央区社会福祉協議会
〒950-0909 新潟市中央区八千代1-3-1
新潟市総合福祉会館3階

新潟県立大学 小澤研究室
〒950-8680 新潟市東区海老ヶ瀬471